明治廿七年三月廿四日發行

女鑑

第五十九號

東京國光社

女鑑第五十九號目次

お春お花



女鑑

第五十九號

女鑑

如何にせば良妻たるを得べき

人の、世にあるは、皆、各、其の職分とすべきところあり。若、之を盡くさゞらんか。これ、その本分を失ふものなり。本分を失へるものは、苟、人といふべからず。而して、男子も女子も、皆、同じく務むべき所は、必、存することにして、毫も、これを忽にすべからざるは、言を待たざるなり。然るに、世には、其の務むべき所を務めず、其の行ふべき所を行はざるもの多し。

抑、女子の、人の妻となりし上は、いかにせば、良き妻たることを得べきかといふこと、常に、其の心の中に思ひ計りて、其の道に適ひ、其の理に違はざらん

様、心懸けざるべからざることは、古今の通則なり。而して、人の妻たる職分の、最重きところは、能く、內事を整理して、家事百般の處置を定め、其の良人をして、專、外事に、心を用ゐて、少も、內顧の患なからしむるにあり。吾人が、常に論ふところの如く、婦人は、貞正にして、而も、識量あり、事の是非善惡を、明に辨へ知りて、能く、良人の內助を爲すをもて、信に、人の妻たるべきものとはするなり。然れども、婦人は、固より、事を專決することなきものなれば、事每に、之を、良人に稟議するは、大なる美德にして、而して、必、なさゞるべからざるものとす。

且、又、其の平居の心得に、和順といふことを忘るべからざるは、今、こゝに論ふの要なかるべし。かゝれば、古人の訓誡にも、常に、之を言へり。それ、夫婦

の間は、人倫の大節なり。かるがゆゑに、男は、強を以て、貴とし、女は、弱を以て、美とすといへり。されば、身を修むることは、敬に如くはなく、強をさくるは、順に如くはなし。夫婦の間は、終身離るべからざるものなれば、常に、義和を以て、親しみ、恩好を以て合するものなり。もし、言語の過てるより、曲直を爭ひ、忿爭の生ずるときは、何の恩義もなかるべし。恩義ともに廢するときは、夫婦の道は離るゝなり。良人、固より離るべからず。ゆゑに、良人に、よく思はるゝを、終身の心得とすべきなれば、能く、良人の心を求めざるべからず。されど、佞ひ媚びんことを勸むるにあらず。たゞ、其の心を專にして、禮義に離れず、其の行の上に、耻づべきもののなきことを勉めて、良人に事ふべきなり。既に、其の貞操ありて、識量あり、而して、禮義ありて、德行を修めなば、人の妻

たるに於いて、復、何の難きところかあらん。

論説

女子教育と婦德との關係

黑河內與四郎

緒言

本邦に於ける女子教育は、素より、遠く、神代と云へる御代にありしことは、日本書紀、古事記、及、萬葉集など云へる太古の事蹟を記載せる歷史、並ょ、其の時代の歌集を見て知り得べきなり。蓋、人民集合して、國をなさば、必、之に應ずる教育なかるべからず。只、世の進運の程度に從ひ、其の成否あるまでにて、禮教の本源、工藝の基本たるべき教育と云へるものなくては叶はぬものなり。さ

れど、男子の教育に比すれば、女子の教育は、進み居らざりけり。是、國家の發達上、止を得ざることにぞある。斯くて、人皇第一代にておはしまし、神武天皇を經、第三十八代天智天皇の御時に至り、始めて、男子の學ぶべき校舍を設け、男子の學校教育を施し給ひしが、女子の教育の如きは、猶、未、家庭教育のみまで、學校に於いて、女子を教育することは、夢にだも心づき給はざりき。是、天智天皇の、男子の學校を創建し給ひしは、支那の唐時代の學制を摸倣し給ひたるものにして、唐朝には、未、女子の學校は無かりしかば、從ひて、我が國にては、女學校の設立には、思ひ當り給はざりけん。必竟、當時、女子の教育は、家庭の教育のみにて、事足りしためにて、女學校を設立すべき時運には達せざりしなり。惟ふに、支那にては、早く、周と云へる時代に、女子學校教育

に類せるものありて、周禮と云へる書に、九嬪、掌㆓婦學之法㆒、以教㆓九御㆒、と見え、また、女史は、掌㆓王后之禮職㆒、書㆓内令㆒、とも見ゆれど、九嬪九御は、共に、後宮の婦人にして、女史は、後宮の役人の如きものなれば、是は、朝廷に於ける女官學職の濫觴にして、唐朝に至りても、未、女學校の設立はなかりしなり。而して、此の唐朝の文化の進み居りしことは、當時、我が國の比にあらざりき。されば、天智天皇の、女學校を設けたまはざりしは、至當の事にぞある。其の後、藤原氏の盛時、即、第六十六代一條天皇の御頃に至りては、世に名高き紫式部、清少納言等の才媛、數多出で、今、猶、女學者の輩出せる一大著明の時期とし、此の類例は、其の前後に見ざることゝて、賞嘆し居ることとなるが、是、はた、家庭教育を受けたるのみにて、未、女學校教育を受けたるにはあらざりき。尋いで、

戰亂の世となりては、男子の學校敎育すら、殆、廢れにければ、女子の學校敎育の如きは、思ひもよらぬことにて、家庭敎育すら、甚、不充分にてありけり。斯くて、德川家康、干戈を以て、天下を平定し、所謂元和偃武の功を顯してよりは、一般敎育の度を高め、爾後の將軍綱吉、吉宗等、亦、意を、敎育に用ゐたりしかば、是より、文武の敎育、相共に盛にして、女子の學校敎育も、稍、其の端緒を開きたる如くにはあれど、未、女子の學校敎育と云ふべき程のものなし。其の眞誠の女子學校敎育の創始は、實に、此の明治の御代の始、五年と云へる歲にぞある。されば、明治五年以前は、すべて、女子家庭敎育時代にして、其の以後こそ、始めて、女子學校敎育時代に進みたるなれ。あはれ、明治の御代は、女子敎育の一大變期とぞ云ふべかめる。

そも〳〵、教育の變更に伴ひ、智德體の三育に、異狀を露すは、世の常にしあれば、女子教育の變更に伴ひ、婦人と云へるもの、性質行爲に、變徵をこそ生じたれ。新舊の女子教育法こそ、婦德隆替の原因とはなりたるなれ。予は、今、本篇に於いて、女子教育の方法の、婦人の德義よ、大關係ありしことを、歴史的に論述するところあらんとす。されど、神代と云へる太古の時期より、現今に至るまでの女子教育に就きて、其の婦德との關係を、一々論證するは、頗、長文に渡らざるを得ざることとなれば、主として、女子の、學校家庭教育並行時代、即、明治の女子教育方法と、其の婦德との關係を論じ、是が比較物として、やゝ女子學校教育時代の狀況に近かりし德川幕府時代の女子教育方法を辨じ、且、更に、古今の女子教育法が、婦德と、如何なる關係を有せしかの例證を示さんた

め、簡單に、神代の太古より、徳川幕府創始に至るまでのことを敍すべし。而して、之をなすには、時代を追ひて、漸次、近代に及ぶ方、讀者に取りては、了解し易からんと思はるれば、是よりは、神代以後、徳川幕府創始に至るまでのことを概論し、尋いで徳川時代に進み、然る後、明治の現今に及び、更に、愚見を述ぶることゝなすべし。

（續く）

國語と漢文學

蒲城　弘

人は、其の身の行、能く修まれば宜しとはいへども、其の身を修め、其の才德を養成するには、兎にも角にも、書を讀み、古今天地間の事を知り得て、而して後に、始めて、完全なる人物とも成るべし。事物の理をだに知らざるものゝ、如何

にして、人の道を全うすることを得べき。

人の、生まるゝより死するまでには、其の變遷すること、凡、幾回なるべき。而して、其の變化するに隨ひて、亦、各、其の行ふべき所、勉むべき所あるは、固よりなり。此、蓋、學ばずして、生まれながら、之を知ることを得べからざることと明なれば、人の學問を重んずるものは、此等の大必要あるが爲ならん。

我が國の上古には、蓋、文字なきにあらざれども、言魂の幸ふ御國なれば、人の履み行ふべき大道は、畏くも、　天つ御祖神の御訓に傳はりて、明に、人心に徹したれば、其の徴證は、時々の人の歌詞などに著れて、永く、世に存せり。さて、其の歌詞の、始めて、人口より出でたるもの、即、文學思想の發端にして、之を記録する文字も、必、此の思想に伴ひて發達すべきことなり。上つ世の文字は、

今、悉、見ること能はざれども、蓋、事を記述するに適するものは、必、ありしなるべし。且、又、言辭の、巧妙にして、華麗なること、我が國の雅言古言に若くものは、復、あるべからず。これ、我が國の、言語を以て、主としたる證なり。されば、我が國に生まれて、我が國の惟神なる道に從ひ、敷島の大和の風を以て、其の身心を練磨せんには、必、本國の言語文字を先として、之を、學問の根本として勉め學ばざるべからず。上つ世の人々は、蓋、皆、斯くありつらんと想はる、垂仁天皇よりして、以後となりては、漢字、漸、傳來して、遂に、應神天皇の朝に盛なるより、我が國の文字言語も、大に、變化を生じて、遂に、和漢の學、合して、一となれるものゝ如し。是より、世々を歴て、愈、盛になれりし故、今日より、以て、上古の徵證となさんとするところのものは、皆、漢字を用

ゐて。之を記述し、而して、言辭は、尙、我が古體を存するものあり。是を以て、我と、漢との文學の、能く、混同合一せるを見るべし。かく混同して以來、今に、殆、二千年の久しきに及べば、之を、我が國固有の文學と謂ふとも敢て、不可なきものゝ如し。其の故は、專我の言語に適合せる文字を用ゐて綴りたるものに至りては、固より、一も、彼の漢土には通せざるものなることゝ決せり。されば、全く、我が國文なることゝ、論を待たざるものあり。而して、我が朝に於いて、文學の盛にして、書物の、多く出來たりしは、上は、奈良の朝より、中は、平安の京にして、終りは、德川の中葉以後より、今の昭代に及びたり。此の間に成りし書籍は、其の幾萬卷なるを知るべからざれども、皆、漢文、又は、國文の二者にあらざるものなし。蓋、我の文學なるものゝ性質は、漢文を利用して、邦言を修飾

したるものなる故に、其の關係する所の深遠なるは、既に、言を待たざるなり。國語の、漢文に於ける、既に、かゝる大關係を有するものなれば、古來の學者は、必、和漢の學を研究するを以て、目的とせざるものなし。これ、蓋、其の關係する所の密なるが故に、單に、一方をのみ修むるとも、其の來由と、本源とを尋ぬるが如きに至りて、間、困難を感ずるものあるが故なり。これを以ても、二者の、兼ね學ばざれは、用をなし難きもののあることを知るに足るべきなり。

近年は、一時、彼の西洋の學術の、盛に、世に行はれしより、人々、皆、其の本を棄てゝ、先、彼の新奇なるものを學ぶに急なるより、終には、本國固有の言語、文學は、一切、之を、不問に付し去りて、程久しくなりて、却りて、我が國風の、如何なるやも、露知らずして、徒に、西洋諸國の事實をのみ諳んずるものも多く

なり行きぬ。これ、豈、事の本末を辨へたるものとやはいふべき。

夫、漢字の、我が國語に於ける關係と、我が文學の、漢文學に於ける關係とは、既に、此の如くなれば、今日の學を爲すものにありては、固より、之を兼修して、其の固有なる所の眞味を咀嚼し、能く、其の要を得て、其の本を立て、然る後に、他の外邦の言語文章をも研究して、博く、宇内の文學にも通ずるを可なりとすべし。

且、又、單に、文學といへば、言語文辭の事のみの如く言ふ人あるも、これ、今日、科學の說にて、實は、國體を知り、倫理を明にし、人道の要を講ずるも、皆、此の中に含有せざるはなし。學をなすもの、男女に論なく、皆、宜しく、深く、此に注意すべきことにこそ。

史談

お春、お花

二十二木堂主人

佐々木高綱の宇治川に於ける先登、快は、則、快なるを覺え、那須野與一の扇の射擊、壯は、則、壯なるをおぼゆるといへども、安んぞ二雄當日の心情を追想して覺えず悲哀の涙に咽ぶもののなきを知らんや。扇の射擊、宇治川の先登の如きは當時は更なり、千載までも傳へて、武士たるもの丶此の上もなき光榮となし、源平盛衰記を讀むものは、誰も案を打ちて壯快を呼はざるもののなきほどなるに、凡て悲哀の涙に咽べるものは、その境遇の切にして、その心情の至れるを懐へばなり。復讐の事今や昔年の夢となりぬ。聖代法律の眼孔は、またこれを容れず。時勢の變、また怪しむに足るもののなきものから、一片赤誠の至情は萬古に亘りて泯びず。豈に、また、古今の別あらんや。物換はり、星うつるに從ふて、風俗も、亦、變はるべし。雪中に筍を掘り、夏夜赤條々になりて、蚊に喰はる丶のみを以て孝道の本色とはなさず。

唯、筍を堀り、蚊に喰はれし誠心を取り來りて、これを今日の風俗に應用すべきのみ。復讐の事も、また然り。その境遇の切にして、その心情の至れるを懐はゞ、懦夫も起ち、怯夫も振ふべし。我邦古來復讐の事多きは人情風俗の然らしむるところ、啻に有鬚男子のみならず、巾幗の輩といへども、義氣天地を動かし、至誠鬼神を泣かしめ、讐を報し、恨を酬ひたるもの、數ふるに遑あらざるが中にも、お春、お花の義氣至誠、千辛萬苦を嘗めて、遂に其の父の讐を復したる心情の如きは、千秋に傳へて、婦女子の龜鑑となすに足るべきを覺ゆるになむ。

お春、お花は双生兒にして、父を茂平と呼び、母をお幹と呼べり。父は常州水戸竹原町に住ひ、冲田屋と稱へて煙草を商ひけるに、性得正直にして篤實をむねとしたりければ、華客次第に増して家ます〳〵繁昌しけるが、明和二年四月十六日、東照宮の祭禮ありけるに茂平の住へる竹原町は年番に當りければ、茂平は門に出で、無禮粗忽のなきやうにと、うち群れる人々を制し、脇目もふらず、いともねもごろに勤めけり。玆に同藩の大番頭にて、中川大右衞門と呼びける侍、當日の警固奉行を仰せ付けられて、祭典年番の町々を見廻はりけるに、茂平が見物人に心配り、いそ

がはしく駈け廻はる折も折、思はず大右衛門の刀の鞘に當りければ、身をひれふして其の過をわびけれども、大右衛門は短慮の一徹、刀を抜く手も見せず、無残にも茂平を斬殺し、名主に告げ去らせたるまゝ、悠然として立去りけることそいとも憎むべき仕業なれ。

此時、お春、お花は芳紀まさに十四にして、水戸中第一の祭禮のことなれば、今日を晴れと着飾りて見物に往かんとしけるに、表の方にて俄に物騒がしき人音、さては怪我せし人ありけるかと、母と共に走り出でゝ見れば、思ひきや我父の切殺されて息もはや絶えたりとは。餘りの事に涙も出でず、唯、あきれに呆れてありけるが、やがて諸共に亡骸に抱き付き、悲歎の涙に咽びしは、よその見る目もあはれなり。近所の人々に諫められて、死体は家にかき入れつ。盡きぬ歎きに落ちてたぎる千行萬行の血の涙、身の浮くばかり泣き咽びて友仙の振袖も朽ち果てむばかりなり。あはれ、今日こそは、樂しく遊び暮さめと思ひしものを、父を失ひてはまた何か樂かならむ。父上さま、さぞや無念におはすらむ。昨日までも、今朝までも、妾等姉妹をいつくしみ、起るにつけ、寝るにつけ、よろづ心をくばり給ひて荒き風にも當てさ

せじと一方ならぬ御養育の恩、報ゆるひまもあらばこそ。今父上を別れまゐらせて、誰を賴みにながらへむ。思へば果敢なき浮世かな。如何に侍なればとて、雜沓の折に刀の鞘にあたりたるばかりにて、人の命を斷つ事やはある。げにも胴欲非道の大右衛門と聲を限りに泣き叫ぶ二人の同胞、母も涙にかきくれて、泣くより外にせんかたもなく、待ちに待ちたる祭禮の日を涙の雨にふりかへて、祝ひにぎはふ鉦太鼓の音もなか〳〵に愁を添ふるばかりなり。かくてあるべきにあらざれば、なく〳〵野邊のいとなみをすまし、供養怠りなく墓前に詣でけるに、四十九日はまたたくうちに立ちにけり。

お春、お花。名を聞くだにやさし。顔も姿も瓜二割とはおろか、花も耻ぢらふ一對の美人。紅顔春淺くして、一番の東風に匂ひそめたる梅花の蕾ゆかしく、綺羅にだに堪へざる細腰たをやかにして風に靡く青柳の糸かろく、いともやさしきその顔、其の姿にもさすがに心やたけかりなむ。姉妹符節を合したるが如き復讐の一念、修羅の妄執を晴らすは、亡き父上に盡くすべき道なるのみならず、母上にも、亦、此の上なき孝行、よしやお宮お信には及ばずとも、親につくす誠心に二つはなし。仇

大右衛門は武藝はすぐれて、力量あくまでも强しときけども、矢竹心の一筋に放てる矢の石にたちたる例もあり、鼠の窮すれば猫を嚙み得ざるものかは。あはれ、名たゝる劍道の達人に就いて學びなば、仇をうつに何かあらむ。母上さまを一人殘しまゐらするは、心掛りなれども、母上さまの實家もあれば、三年の程はお側にはべらずとも安かりなむと、姉妹語り合ひたる末、母に其の志をうち明しけるに、さすがに、初の程はいさめけるが、志のいとせちなるにめでゝ許しけり。お幹一人にては、商賣を爲すことも出來ねば、店をやめて、其の實家の弟なる辻田村の良助の許へ移ることゝ定め、取りあつめたる金子五十兩を姉妹の着物のなかに縫ひこみ、支度もそれ〳〵調ひければ、明和三年五月廿三日といふ日に、別を告げて立ちいづるお春お花、勇める心にもいとゞ名殘はをしまれて、降りみ、ふらずみ定めなき五月雨に、かたみに絞る涙を添へて、別の袂やひとしほに露けからむ。

歸國するまでには、間もあれば、今宵は亡き父の墓前に通夜せむとて、姉妹つれだちて父の墓に暇乞の香華を手向け、空しき石塔に向ひて生ける人にものいふごとく心のたけを云ひきこえ、よもすがら彌陀の名號となへつゝ一夜をあかし、

しのゝめ告ぐる雞の聲にたち上りて、仙臺にと志してゆく路すがら、武術にすぐれたる人やあると尋ねゆくほどに、湯本といふ湯治場にて、岩城平の城主安藤對馬守の家中なる戸田逸角といふ人の十八番の武藝に達し、道を守り、義を行ひ、慈悲ふかく、禮義厚きよしを聞き、大に喜びて戸田の家に尋ねゆき、憚る身なればわざと實の事は打明さず、唯幼少にて、親に別れ、後見と頼たる人こゝろ惡しく、家は更なり、田地まで押領せる其の上にあまつさへ、兩女をも流れの廓へ賣らむといふに詮方つきて、家出せしものにて、給金などに望みはなく、偏に御奉公こそ願はしけれと頼みければ、妻なる人いたう憐み、其の由主人の逸角にもはなして、姉妹ともに召しつかひぬ。かくて兩人は幾重にも主人の意に愜ひて、大望を遂げんとて、身を粉にして働きければ、いよ／＼妻のあるじの氣に愜ひて、髪結び、衣裳の着振より化粧の指圖まで、萬事心をつくされければ、天性の麗質になほ一層の美を添へたり。數月たちてのち、奥方兩女に向ひ、今より表長屋の稽古場へ茶菓子などの持運びはそなたらに申付くるゆゑ、大身の歴々方へ不調法なきやうにつとむべし。また、兵術の一手位は、女ながらも見習ひ置かれ、末々出世の種にもならむと、ねもごろ

に吩附て日々稽古場へ給仕につかはしけれど、二人の美しき容色に門下の人々思をこがし、或は、女房に望むものもありて、兩女の取沙汰のみしけるが、兩人は更になまめける風なく、優にやさしき美形の猛りに猛りたるあらくれ男の中にまじれるさまは、さながら松柏の森に桃櫻の綻べるに似たり。一年あまり過ぎけるに、兩人の起居行跡ます〳〵正しく戸障子の開閉さへしとやかにて下女はしためとは見えざりけり。

戸田逸角の養子に平九郎とよべるものあり。一夜夢破れ、枕を欹てゝ聞けど、勝手の方にて竹刀の音す。耳を澄して聽き居るにその師匠の極意の手音なりけれど、愈あやしみて、密に出でゝ伺ふに、師匠にあらず、門弟にあらず、兩人の下女の甲斐甲斐しく襷をあやどりて互に打合ふなりけり。その竹刀の手練あつぱれ他の人の五六年の修業よりもすぐれたれど、いといぶかしく思ひつゝ、翌朝て此の事父に打明しけるに、逸角も合點ゆかず。とも角も尋ねて見むとて、兩人を人なき處に呼びて問ひけるに、大事の件と胸にひめて打明さゝりしが、我が武門の身にして兵法を激ふれど下女端女までが武を嗜むと云へば家の面目なり。そなたども女の業にもあら

ざることを左樣に心掛くるは深き大望あることならむ。もしさる望あらむ包まず明すべし。我等父子後見して能きに計らひ得させむといと切なる逸角の詞に、兩人は喜びて身の上を落ちもなく打明しければ、逸角親子は其の孝心に感じ、是より奉公はするに及ばざれば、ひたすら稽古のみ致すべしとて敎へけるに、半年ばかりにして、其の極意を極はめたり。今は敵討に不足なし。近々歸國して公けに願を上げんとて用意しけるよ、或日平九郎は門弟たちに向ひてお春、お花の手練を物語り、彼等二人互に立合せむといふに、石山傳內とて腕自慢の侍士ありけるが、女同士にては興薄し、是非身共が眞劍を以て試合申さむと勇みたち、さま〴〵に止むれども聽かざれば、今止むことを得ず、まづお春を立合せけるに、傳內はお春の振袖をきり落して勝ちたりと思の外、早くも象牙の笄を襟元にうち込まれてありければ、傳內の負となりぬ。こたびは、お花と立合ひて其の薙刀の石突の方を三寸ばかり切り折りて今度こそは勝ちたれど思の外、又もや、針を三本髻にうち立られて、傳內の負となり、重ね〴〵の不覺いと見苦しけれど、みな指してぞ笑ひける。此の沙汰後に家中に高くなり、遂に國主の耳に入り、以ての外の奴なりと怒り給ひて改易の上、追

放仰せ付けられたり。傳内只口惜しく思ひ、一圖にお春姉妹に怨を重ね、この遺恨を晴らさんと案じけるに、兩人は中川大右衞門を敵とせる由を知りて、兩女にさきだちて水戸へ來り、大右衞門にかくと告ければ、前年の刀傷によりて、今は閉門なりけるが、娘の事を聞きて大に驚き、石山の手を借りて忍び〳〵に家具を賣拂ひ、夫婦つれだち夜に紛れて出奔しけり。

かくとは神ならぬ身の知る由もなく、多年の苦心やうやく時を得て天にも上る思をなし、明和五年三月十八日戶田親子に別を告げ、勇みにいさみて、故郷に歸りて聞けば、思ひがけきや仇なる人は巳に身を隱くして影だになからんとは。せめて母上の恙なき姿を拜みて積れる思を晴さんと樂しみけるに、憐れや母のお齡は前年の春病にかゝりて果敢なくなりぬ。父既に非命に仆れてたより少なき身となりけるに、今また母を別れ、その上にも、仇の行方知れずと聞きたる姉妹の心の中は如何なりけむ。殊に母は夫を別れて間もなく、また二人の娘にわかれたるより、一層の憂に沈みて病を引き起したりと聞きし時の姉妹の心の中は如何なりけむ。我等の身だに、母上の側に侍りしならば、みまかり給ふことはなかりしものを、我等あらざるを苦に

やみてみまかり給へぞ、手は下さずとも、妾等が殺しまゐらせしも同じ事、思へぞ罪ふかき二人の姉妹、許させ給へ、母上樣と、同胞共に涙にかきくれ、世を果敢なみて自害も爲兼ね有樣なりけるが、良助夫婦にさまぐ\と說きすゝめられて、やうやく氣を取り直し、敵にげたりとて、普天の下、王土にあらざる限もなし。六十六州ひろしといへども力を竭くし、身を碎きて、尋ねなぞ、など尋ね得ざる事やある。ただ、一日もはやく、敵を討つてこそ母にもわびるよすがなれ。命の限りてんかぎり、兩親につくす兩人の誠、草葉の蔭よりあはれとも見そなはせ。いざゝらば、叔父上さま、叔母上さま、さきくましませと良助夫婦に暇を告げ、父母の墓前に詣でゝ、水をそゝぎ、香華をさゝげ、袂を聯ねて泣き伏しけるは、あはれにも、又殊勝なる孝子の心情、立ち去るに忍びずして、袖にしたゝる涙を拭ひもあへず、かこちに歎ちてありけるほどに、春の長き日も、いつしか西に沈み、無常を告ぐる山寺の鐘の響に散りかゝる木々の花びら、飛び去り、飛び來りて袖に點し、裾につく、春の夕暮の景色、霞こめたる山下蔭を吹き拂ふ春風だになきこそあはれなれ。

お春、お花は岩城なる戸田家へ立ちかへり、有りし次第を物語れぞ、逸角夫婦平九

郞も、中川の卑怯未練を罵り、此の上は何國如何なる果までも、尋ね出して本意を達せよ、殊に大右衛門の身は夫婦づれゆゑ尋ぬるには手がゝりあり。まづ奥州仙臺邊を探し、心有る人に隨身せよと說き勸めらるゝに力を得て、厚く禮をのべて立去り、秋田にいたりて、圖らずも慈悲深き商人の妻の情に引きとめられて、さま〴〵詮索すれども、手掛りなく、兎角するほど、冬になりて、降り積める雪に往來も出來がたければ、とゞめらるゝまゝに滯留し、翌年彌生十三日といふ日に別を告げて發足し、とある峠にかゝりけるほどに、三人の虛無僧の下り來れるに遇ひぬ。その一人は、かの石山傳內にて、他の二人は寬學、雲學とよべる關東の浪人なり。お春、お花は、固より、その傳內なることを知らざれども、傳內は早くも編笠の中より伺ひ見て、それと知り、二人の虛無僧に向ひて、あれなる女共の爲に我はかく流浪せるなりと、さも恨めしげに言ひければ、短慮の兩人一議にも及ばず。直にかけ上りて、嶺に憩ひ居りたる姉妹に迫りたるに、寬學は、お春の一刀に首足處を異にし、雲學無念と立ちかゝれば、また、お花の鋭き霜鋒に大袈裟に斬り下げられて、果敢なく息は絕えはてぬ。何をもお春は今一人はも遁すまじと追ひかけたるに、傳內は

雲を霞とにげさりて行方もしらずなりにけり。げに笑ふべきは、寛學、雲學の犬死、賤しむべき傳内の薄情卑怯、賞むるに餘りあるものはお春姉妹の武勇と苦節となりけり。

その翌日、お春姉妹は津輕の城下に着きぬ。此國の鎭守に、弓弦大明神といふ大社あり。兩女は是に參拜して祈誓を凝らしける。折柄三人の侍士來りて參詣しけるが、その中の一人は社殿にかゝげたる發句の額に來水とあるを見て、こは誰なるやを問へば、一人は答へて、去年の秋水戸より來りたる浪士にて中田大治といふものなりと、いひつゝ立去りけるを、二人の姉妹は洩れ聞きてひそかに喜び、去年の秋水戸より來りたる浪士といへど、中川大右衛門に相違なからむ。敵の在所も大概はわかりたり。しかし姉妹一緒に連れ行ては人目に立つゆゑ、是れより別れ〳〵に尋ね出さむと語り合ひ、厭もわかれぬ姉妹が敵をうちたきばかりに泣く〳〵も袂を別ち、出遇ふ處を定めて姉のお春は顔は墨にて塗りよごし、膝に馬の沓を結び付けて、膝行兒と姿を替へて、藥王山現昌寺の乞食が原に身を潜めぬ。妹のお花は家中の花房壽四郎といふ侍に召しつかはれ、身を愼みて仕ふるほどに、主夫婦のいたはりも一

方ならず。行儀作法正しきうへにも世にも稀なる美少婦なれバ、家中の取沙汰一方ならざりけり。

さる日、お花の奥方の代參にて藥師堂に詣でゝ、歸るさに乞兒の姉に逢ひて歸りけるに、その日中田大治といふ來客あり。こは花房の取りなしによりて此の藩に召しかゝへられたる侍士なり。此の度主用を帶びて、江戸へ上らんとするに、その妻當地に慣れざれバ、二三日の間花房の女中をからんとて相談に來りけるに、花房夫婦は異議もなく、十日を限りてお花を中田の家にぞつかはしける。

その夜の事なりき。中田の家へ道具屋體のもの來りて兼ねて大治の誂へ置きたる新身の刀を差し出しけり。大治はためつ、すがめつ刀を見守りて江戸の永代橋邊にて試し斬をなさむとつぶやきけるを、下部の駒藏聞きて、そは江戸にゆかるゝまでもなし、現昌寺の乞食が原に此の頃來りたる足痿の女乞食あり。今夜同所に趣きてかの女を斬り給ひては如何にといひければ、大治喜び二人つれだちて出でゝ往きぬ。ろを聞きたるお花の心は如何なりけむ。現昌寺の乞食が原に此頃來りたる足痿の女乞食とは疑もなく我姉なり。日頃の手なみもあれど、大治如きものが二人ゆきたれ

むとて、闇々討たるゝことはあるまじけれども、若し寝込にても切り入りなむ如何にせむなど、起ちつ、居つ案じ煩ひけるに、大治は一人にて歸り來り、乞兒の女餘程手練のものにて、駒藏はあへなく斬り殺されたれど、復讐せむとて同勢を催ふして再びいでゆきぬ。

お花氣も氣ならず。顛へにふるへてありけれど、大治の妻は之をはげまし、武士の家にこのやうなことは有りがちなり。そなたも武士の家に奉行しながら、何を左樣におど／＼するぞといひつゝ、口に任せて其の夫が前年水戸にて沖田屋茂平といふものを斬りたる事を語りければ、お花勇んで躍り上り、妾こそその茂平の娘なれ。うき身をやつせし甲斐ありて、今日、唯今相逢ふこそ幸なれ。不倶戴天の父の仇のがしはせじと直に主の妻を蹴倒して柱に縛りつけ、足も空に花房の方へかけつけて事の由を語り、彦四郎と共に乞兒が原へ走りゆくに、闇の夜ながら、多年のうき雲霽にはれて勇みに勇める心の中に眞如の月さすがに明かにして、瞬くうちに乞兒が原に到れば、お春は多勢を相手に身を搆へ、太刀拔き翳して衝立たり。花房の來れるを中田の加勢のものは皆逃け去りて、中田ひとり茫然としてありけるを、姉妹立よ

りて難なく生捕りけるこそ心地よかりし次第なりしか。
中川大右衛門の中田大治は一先づ入牢申付けられけるか、津輕侯より水戸侯へ使者を立られ、今般の次第を屆られけれど、水戸藩にてはそれ〴〵評議の末、中田大右衛門は仕置に行ふべきものなれども、お春姉妹の志に免じ、格別の儀を以て立合勝負を許し、中湊に行馬をしつらひぬ。多年の宿志茲に達し、お春姉妹中川大右衛門を斬りて父の仇を復しけるは、明和六年八月十四日なり。
仇を復してのち、お春は戸田逸角の養子平九郎に嫁し、お花は花房彦四郎の息男彦太郎に嫁し、良助の末子命によりて沖田屋の家名を相續し、孰れも子孫繁昌しけりといふ。
あはれ、お春、お花。容貌うるはしくして萬人にすぐれたり。されど、其の心はその容貌よりも更にうるはし。三年餘りも一日の如く、心を一に、父の仇を復せむと志し、女の念力凝りてかよはき手にも一年のほどに武藝の極意を究めて男子も及ばぬ技量を有するに至りたるも、ひとへに孝心の切なるによれり。千辛萬苦を嘗むるも露たゆます、遂に父の仇を復し、おのも〴〵良緣を得て末永く榮ゆけるも誰れか

孝道の餘徳にあらずといはむ。親に孝なる女にして夫に不貞なる筈なく、子に不慈なる筈もなし。孝は百行の本といひけるは、洵に千古の金言なり。お春、お花の所爲はまた倣ふべくもあらず。されど、其の一片至誠の心は、万古婦女子の鑑なりと思はれてなむ。

孝婦しげが事

花山圭二郎

天保の初年、出羽の國飽海郡北堺村の農民總兵衛が妻にしげといへる孝婦あり。心さま至りて正しく靜かにして、能く舅姑に事へたり。姑の福は、久く中風を患ひ、手足なども不隨となり、食事も自ら爲すこと能はず。しげ能くこれを養ひて、其用を足し、少しも怠ることなく、夏は涼しき方にいざなひ、冬は寒き夜は身を以て暖め終始姑の傍をも離れず。暇ある時は繩なひ筵を織りて魚類菓子など買ひ求めて之を進めたりき。十四年の正月八日其の家火災に罹りしに、此の日は、村内の人々皆野樂に出でたりけれど、兒女のみありて噪げるも、遂に其の甲斐なくて、全く燒け失せぬ、さて、しげは、姑の腰を抱きて燒け死に居たりけり。あはれ、其の姑を助け

んと其の身をも顧みずて力を極めて闇の次なる間までは出つるも、焔よや包まれ、烟にや咽びけん、遂にこゝに至れりしとぞ、まことに哀しきことの極ならずや。此の事の趣、藩主にまで、縣令伊黒重教等より言上せしかゞ、其の跡を吊ふべき料、並に碑を建つべき黄金をも賜はりける。えげが孝節の程、誠に人心を感ずるに餘りありとぞいふべき。かくて、伊黒重教其の碑を立て、其のありし世の事どもを池田玄齋といへる人に託して、書き記るさしめ、後の世の鏡もと表せられける。其の碑文の後に、左の歌をも併せて彫られたり。

千代かけて茂る正木のたまかづら
かゞはしき名をあやかざらめや

池田玄齋

山川はうつりゆくともながき世に
朽せぬいへは名にこそありけり

伊黒重教

家政

看護法捷徑（三十四）

三笠舍主人

第四編　常に多き病の心得方（つゞき）

（九）腹痛　附下利

一 腹痛に、二種あり、胃部則心窩にて、劇しき痛みを興し、且其痛み多くは間斷ありて、一進一退し、痛劇き時は、患者苦痛に堪へずして、煩悶し、往々嘔吐を興すものを、胃痙と云。此症極めて劇しきものは、心神昏瞶に至るもの有。胃痙に比すれど、痛稍輕くして、且腹の下部に於て、發するものを、疝痛と云、是れは腸に興る痛なり、

二 胃痙、又は疝痛を興したる時は、速に其部を温保し、（温巴布等にて、）兼て温湯、又は温牛乳を、内服せしむべし。之れにて、緩解せざる時は、患部に芥子泥を貼すべし、猶痛止ざる時は、温湯の灌腸を行べし。且鎮痛薬を與ふべしと雖、こは醫に非ざれば不可なり。

三此兩症は、胃寒、又は身の熱したる時、急に氷片の如き冷物を飲用するより來り、或は不消化物、不新鮮物、又は平常食し慣れざる食物、又は未熟の果實、等を食するにより、又は數種の食物の混用、又は暴食、等より來るものにて、數回發する時は、慣習性と爲る事あり。故に常に、此等の飲食物に注意すべし。

四下痢は、屢上圊して、稀薄の便を漏らし、多くは兼て、腹痛あるものを云、此症には、温かにして粘滑なる飲料、例之ば、温葛湯、山慈姑煎、大麥煎、等を内服せしめ、兼て抱布兒斯散一包を與へて、腸の運動を止め、(之れ無きか、又は與へ方不明なる時は、強て與るに及ばず)腹部を温め、身を温包して、發汗を促すべし。下痢。猶止らざる時は、醫の診を乞ふべし。

五下利を亦、種々の食物の誤用、又濫用より來る事、最も多し、故に亦、三項に掲げたる、飲食物に注意すべし。

(十) 蛔虫

一蛔虫は、童幼に多き症なれども、亦大人にも屢生ず。少數なる時は、格別害を爲さずと雖、蕃殖して多數となる時は、種々の症状を誘起す。但、人によりては、僅

かに一二條生ずるも、病症を誘起するもの有。

二蛔虫を生ずる時は、氣分悪しく、鬱憂し、或は食欲進まず、特に小兒に在りては、種々の症狀を誘起して、平日の嗜好を變し、或は不時に發熱し、或は夜間眠に就き難く、卒然號泣して、癇氣強く、或は劇しき腹痛を發し、或は食欲俄かに進まず、其外、眼光一種の異常を呈し、又は眼圍に、暗青色の薄き輪を顯し、或は故なく、一方の頰に、紅色を呈する等は、皆多分腸中に、蛔虫の生したる徵とす、宜しく醫の診を乞ふべし。

三蛔虫は、特異の殺虫藥、則「サントニーネ」を内服せしむれば、殆驅除し得ざるもの無し、此藥は、大人なれば、一日の量、大抵四五厘乃至六七厘、猶場合にては、多量を用ゐるも可なり、五六歳の小兒なれば、一日二厘前後、大抵二三日續て用ゐれば、驅虫の効を奏す、最初用法に就て、能く醫の敎を受け置き、小兒などにては大抵一年に二三回宛、適宜の時に、之を用ゐるを良とす。

漫錄

あうむ文學　楢の舍主人

○朋友

閑居とは、如何なるをいひ、又、その區域は如何ばかりなるかは、何人もよく覺り得べきやうなれど、これなかなかにむつかしき問題ならんかし。けだし、群集は朋友にあらず。たゞ多く面貌を接したるは、肖像展覽所に異ならず、愛なき談話は、銅鑼うちたつるに同じければなり。されど、大都府は、大閑居ありと說ける人もありとかや。そは、住民叢雜の市街にありては、知己朋友の各所に散在せるもの、車馬の便、往來のよきにもかゝはらず、相互の交通さまで多からず。田舍邊陬の僻に一村落をなせる所に、隣保相訪ひ故舊相談するの度、反つて多きは、常に巳れらの目擊するところなり。巳れらはまさに、眞成の朋友なきは、絕體に且痛ましき閑居なりといはむとす。これなくば、世界はたゞ一の不毛地に過ぎざるべし。

朋友を得れば、二樣の益あり。まづその主なるは、喜怒哀樂の情の充滿膨脹を、自由に開通漏洩して、感情の快活を來たし得ることこれなり。閉息の身體に危險なると等しく、感情を抑へてこれを暢べず、鬱悒沈思して以て過ぎむこと、誠に危險とやいはまし。肝臟肺臟腦膸の諸症、皆各その適當の藥種によりて、開通治療せらるべし。され

ば、感情に至りては、人參大黄と雖も、到底その用をなすこと能はず。朋友といへる特種の千金膏の力を借りて、以てこれを治療せざるべからず。喜、悲、憂、望、畏、などは更にも言はず。いやしくも情を壓迫するほどのものは、みなこれを朋友に語らはば、忽にしてこれを安らかにし得らるべきなり。むかし、莊公とやらむ、吾ひとり母なしと歎きけむは、さも有りけむかし。朋友の必要缺ぐべからざるは、父母の關係にもつぐべきにこそ。されば、「ひさごらす」も、心を食はしむべからずといひける如く、うちわけ語らふべき朋友あらざらむは、自わが心を食ふ者とや、いふべからむ。自殺は、豈たゞに白刄を執る者のいひならむ。凡、何事によらず、これをわが朋に告ぐれば、二種の相反したる結果を來たすものなり。即、快樂はこれがために二倍し、悲哀は、これによりて半減す。けだし、人、快樂ありて、これをその朋に告ぐれば、必やこれを增大するを得べく、悲哀ありて、これを告ぐれば、必これを半減するを得べし。加之、互に相一致結合して以て動かば、外は一切の壓迫を弱うし、内は進取の氣を强うするに足りなむ。一矢の折れ易きも、束ぬれば以て千貫を釣くべし。朋友なるかな。朋友なるかな。

朋友の第二益は、實に理性を健全强固ならしむるにあり。けだし、感情の暴風急雨は、朋友によりて快晴となるべく、思想の暗黒紛雜も、朋友の光明を得て、始て赫々たる白日となるべきなり。たとひ、忠實の助言は、たやすく得難からむとても、

麻の緒のうち亂れたらむ如くあまりに充満せる思想も、他人にこれを交通談話せむには、はじめその胸中にありし時よりも、一層順序よく、一層容易にこれを排列整頓し、遂には、已にもまして賢明となるを感ずるに至らむ。されば、終日の熟考は、一時の談話に及ぶくもあらず。すでに或人もいひけむやうに、談話は花毛氈を敷きひろげたらむが如し。そは、何事にもあれ、如何にうるはしき思想ならむとも、これを言ひ表はさゞらむには、卷きたる毛氈にひとしく、その摸様の、花鳥か、山水か、美なるか、美ならざるか、それ然なりと知り得られざらむが如ければなり。朋友は、あたかも物品鑑定家のごとし。われら、これに。わが心裏の遠近法にかなへりや、濃淡その宜を得たるかなど、判別を托せずばあるべからず。さらで、わが思想の暗黒紛雜を變じて、赫々たる白日となさむには、必助言あるほどの價値ある、眞成の朋友にのみ談合すべきにやとおもはるれど、あながち、左る事とのみ限るべからず。たとひ、助言し得ざるほどのものなりとも、これに對ひて、一席の談話を試みむに、已自その心の暗黒を照らして紛雜を解き、發明するところあるに至らむ。砥石は、物を截ること能はず。能はずと雖も、他のこれにむかふ者をして、鋭利明斷ならしむ。その幽鬱に過ぎむよりは、むしろ、肖像に語れ。ましてや、助言を得むとするもの、これを語れ。これを談せ。これをその忠實の朋友に語れ。

まことや、人は習慣に染み、感情に溺るるものなれ

む、己の理解、己の判斷よりも、他の助言より受け得たる智力光明こそ、淸淨純潔にはありけれ。されバ、友人より得たる勸告と、自與ふる勸告との相異なること、さながら、友人と諂諛者との間に於ける勸告の如くなるべし。蓋、已自ほど諂ふものはあらざるべく、朋友ばかり矯正回復に効あるはあらざるべきなり。

勸告に二樣あり。一は行爲にかゝはり、他は事業にかゝはる。われら、精神を健全にし、かりにも病弱に傾かざらむとならバ、朋友の忠實なる諫說に倚りて、益健全に、益強固にならしめざるべからず。己に促すに非常の讜議を以てせむ、反りて或はその心を刺痛銹入するの恐あらむ。善き道德の書も、或は少しく阿諛にして、活氣に乏しきこともあらむ。他の過失を見て己の鑑戒となすは、時に不適當のをり有らむ。これを用ひこれを行ふに、最良の藥方は、實に朋友の諫說にこそはありけれ。語るべきの朋なく、告ぐべきの友なきがために、名譽をおとし、幸福を失ひ、終世地獄に沈淪して、再度極樂を逍遙すること能はざるは、已れら實驗によりて、夙に承認するところにして、また竊に痛悼に堪へざるところなり。されバ、われらの眞朋友を得て、その忠實の諫說を受けむと欲するは、饑者の食、渇者の液にもたちまさるべし。隻眼は、兩眼よりもよく見ゆといはゞいへ。雙六する人、傍觀者よりもよく見ゆといはゞいへ。國風は、夷狄に劣れりといはゞいへ。嫉妬は、無智ならずといはゞいへ。たとひ、千の妄

想、臆の假空といふとも、善き勸告は、事業を整理進行するに大補益ありとの堅城を侵すことは、決して能はざるべからむ。もし、人、一事は、甲に、一事は乙になど、各別に商議せむとならば、商議せざらむよりは、益するところあらむ。されど、かくては、二つの危難に陷いることあるべし。その一つは、忠實の勸告を得ること能はざることこれなり。何となれば、およそ、人、常にその思ふところに僻するものなれば、一事を商議談合するにあたりて、完全忠實の朋友にあらざるよりは、己を賛し己に從ひ、是を是とし、非を非とする眞成の助言を受くること能はざればなり。またその一つは、たとひ他人に惡意なしとするも、危害と悔恨との混合物なる助言を與へらるゝことこれなり。今それ疾病に罹るものあり。其國手の救濟に巧なるを聞き、これに治療を托したりとせむか。國手もと疾病に親しといへども、その人の過去の經過をば、更に知らざるを以て、たゞに局部の診察により、現在の苦痛を鎭むることは容易なり。されど、他日更にこれによりて、不治の難症ををこすに至るべきをいかにせむ。これ實に、疾病を醫せんとして、反りてその身を倒すにおなじ。この故に、われら不幸にして、疾病に侵されむには、むしろ平素相識ある醫者によりて、根治せられむことを望む。一面の識なき國手は、われに於いて何かあらむ。助言の朋友におけるは、なほかくのごとし。われを知る者は、眞の朋友なり。これに商りこれと談せば、たゞに目前の事業を進善し得

らるゝのみならず。なほ大に將來の利便を增加し得られむこと、昭たる日光を睹るがごときものあらむ。

これらのほか、朋友は如何なること、如何なるをりにも、一部の補助となるものなれど、こゝに生を享くるものは、まさにこれを得て、相結托し相商議し、以て人世の幸福を圓滿ならしむべし。人誰れか、係累なからむ。人誰れか、係累なからむ。

梁川氏紅蘭女史に就いて

三輪田眞佐子

女史は、近代の日本女子中、最、名高き人なり。從ひて、女子の生涯に就いては、記すべきもの少なからず。されば、此の紙面にては、精しく記すに足る餘白なきを恐るゝのみならず、吾、異日、女史の傳記を詳に書き、世に公にせんと思へど、今日は、單に、女史の逸事一二のみをしるさん。

さて、茲にしるす事項は、決して、口碑に傳はる虚談にあらず、そは、吾れ幼き時、女子の愛を得て、養ひの親子とまで恃みしかば、幸に、其の性行を自ら見、其の來歷を親しく聞くを得たりしを以て、猶、吾が耳底に殘れる女史の音聲と、眼中に止まる女史の動作とを、そのまゝ顯はすものなり。故に、其の文飾なきを怪しみな給ひそ。

女史は、詩人として道學的儒學者とし、或は、政論家として、雷名を天下に轟かしたりし、梁川星巖先生の内君なりしが、其の父は、美州の豪族な

りしも、固と、田舍の生活をなすものなれバ、女史に、文事を學ばしめざるにあらざりしも、主として、田舍の生業を營ませけるに、星巖先生、兼て同宗の因みありたりけれバ、仄かに、女史の氣象高尙にして、才幹凡俗にあらざるを知り得たりけん、大に女子を感賞して、遂に、女史を迎へぜ、偕老の契りを結ばんことを、媒聘を以て、女史の兩親に請ひたりき。奇なる哉、既に、署、婚姻の時日も定まる頃、先生、忽然、女史に告げて曰ひけるやう、余兩三月を期して、近國を歴遊せん、卿余が歸り來らん日までは、三體詩を諳らんぜよかしと云ふて去りにけり。女史其の命に違はじと、日々、布機に倚りて布を織りつゝ、三體詩を右側に置き、心をこめて學びたりけれバ、約束の期に先ちて、悉、暗誦するに至りたりき。其の時、自ら心に思ふ樣、良人、今日にも、明日にも歸り來らん、歸らば如何ばかりか樂しかるらんと、待ち居たりけるに、如何なる次第にや、先生は三年餘の星霜を經るに、未、風の音信だもあらず、鴻雁鳴きて北に飛び、泉水流れて山に歸らざるを見るにつきても、唯、女史の憂を増すのみなれば、父母初め、親戚知人諸共に、女史をして、他家に嫁せしめんと勸めたりき。あはれ、平凡なる輕薄女子なりせば、如何にや處置せん乎。實に、歳寒くして、松柏の緑を變へざる如く、女史自若として、婚姻は重しと雖、約誓より輕しと思へば、我が心石に非ず、轉ずべからず、我が心席に非ず、卷くべからずと云ひて、遂に動かざりしが、偶、先

生、其の秋に歸り、余、崎陽に行きて、尙、足らざるの學を研き居りたりし由を告げ、且、女史に向ふて、三體詩は少しく讀みたりしやと問ひしに、女史諳んじて、一字だに誤らざるのみならず、其の間、大に文事を修めたりしかど、先生益、悅びて、目出度女史と婚を結びたりき、是をこそ、才士佳人の奇遇と云ふべけれ、世の約束を輕んじ、及び、家事を行ふ傍ら學事に志すは難しと云ふ女子は、地下の女史に對して耻づるなからん乎。

凡、女徳を備ふるものは、女藝に迂く、女藝に通ずるものは、女德修らざるもの多し。さるに、女史は、田舍の鄭重なる家庭敎育を受けしを以て、女藝一般を知るは、衆に秀で、殊に、裁縫に巧みなりしのみならず、大に經義に通じ、亦、文雅の心に富み、詩を能く作り、畫に最も妙なりき。されど、女史の詩と畫に長けたるは、遊惰の心、娛樂の念より始まりしにあらずして、天禀の非凡なるより、信に宇宙の秘義を感じ、心の盛德、自然に溢れて、詩文となりたりしものなり。其の畫を嗜むも、固と、其の畫くべき物體の性質を歎賞して、己が潔白なる觀念を畫以て顯はさむためなりき、故に、其の畫きたるものは、蘭菊、及び、梅等多し、亦、以て、其の志したりし所を知るに足らむ。文物盛なる明治の今日さへ、雅俗の才を兼ね卓爾として、雜莠と群をなさぬ芳蘭に比すべき、女史の如きもの、幾人かある。而して、女史は、唯に、女藝のみに秀でたりしにあらず、女德に至りては、尙、美なりき。乃、女史は、幼時家にあ

りては、父母に孝深かりき。嫁しては、先生に情厚かりき、女史嘗て、良人より小遣金として、小判若干を與へられたるや、大に歡び、直に、之を嚢に納め、朝夕身邊に纏ひたりき。是、小童らしく聞ゆるも、夫婦相愛するの眞味は、斯くの如き燕居に存せり。吾が之を玆に記るすは、傑女の生活は、理屈のみにて、無味なるものと誤了するものあらんことを恐るればなり。(我せことふたり見ませばいくばくかこの降雪の嬉しからまし)是、夫婦の眞情を寫し給へる、光明皇后の御歌なり。誠に、人の妻たるもの丶典にぞある。亦、男女席を同じくせざる如き、東洋特別の女德を守りたりしは、曩に吾が女子要言に於いて葛仙なる僧が、女史の常に用ゐし乘り物を、女史に告げずして、借り用ゐしを聞き、男女の禮を亂すものとして、痛く怒り、之を破りて、薪とまでなしたりし一例を以ても、他を知り得べし。特に、女史の勤王の志深く愛國の情切なりき。豈に、今日の男女同權なる意味を誤解して徒に外觀を修め、末藝を事として、獨立國の風儀を亂して憚らざるものの類ならんや。故に、女史は、經義に明にして、諸子百家の言に通じたりしと雖、決して、文句を弄し、美文を樂む腐儒の比に非ず、孔孟の學を實踐躬行したりき。世の女史を唯に文字を讀み得るみ見るものあるは、未女史を知らざるものなり。婦人、若くば、山水を友とする文人墨客としての女史の氣風、極めて非凡なれば、世の俗女の衣服の美にして、以て誇り、化粧を施して樂める如き、

ものと、同日に論ずべからず。女史、嘗て、先生に從ひ、諸國を遊歴するに當りて、始め家を立ち出づる時、質素なる衣裳に、黒繻子の帶を纒ひたりしに、長の旅路なれバ、朝には、風に吹かれ、夕には、雨に洒され、遂に襤褸となりたりしが。或時、江州の某とて、可なり有名なりし女子を尋ねし時、某、女史の帶を見て、其の婢と、互に、目知らせして、相笑ひたりしかど、其の時、女史某を以て、彼も、亦、文字のみを知る凡女なる哉と、反て本意なく思ひたりしとかや。實に、女史は、破れたる褞袍を衣て、狐狢を衣たるものと、共に立ちて、耻ぢざる子路にも勝るめり。勿論、女子は、其の容儀を修むること肝要なれど、決して、粗暴の擧止あるべからず。吾熟々女史の燕居を見たりしに、動作、服裝、各中庸に適ひたりしのみならず、女史は、天性美麗なれバ、格別高雅にして、文質宜しきを得たりしものと言ふべきかな。

女史は、斯くまで、女德、及び、女藝、具さに備はりて、威儀の棣々たりければ、實に、人の師たるに耻ぢざりき。是を以てにや、當時、仙臺の舊侯初め、諸大名の女公子等、女史を仰ぎて、師となしたりし、人、少なからず。故に、女史は、巨人星巖先生と、共に、相表裡して、天下を敎化することぞ、最も、大なりしと云ふべし。されどにや、政府、女史に授くるに、敎正の榮稱を以てせんとしたりき。されど、固と天爵を尊びて、虚飾を嫌ふ女史なれバ、敢て、之を受けざりき。是、世に、

平凡女子の能くなす處ならんや。蓋、今日は、敎正なるものは、神道家の位格のみに限るめるも、當時は、一般の風敎家に與へたりしものなれど、恰、今日の博士に似たり。此の區別をな誤まりそ。

天道是乎非乎、星巖先生、嘗て、國事を以て、政府より、有罪人視されたりしが、其の禍、施いて女史の身に及びたりしを以て、遂に、捕へられて鐵窓の内に幽閉さるゝに至りき。あはれ、平凡女子なりせば、若、縲絏の不幸に罹る時もあらば、大に感じ、或は、狂するにも至らん。されど、盤根錯節に逢ふて、利器を知り、困難辛苦に際して、人物を知り得べし。女史は、其の災日を送るに如何したりしかを見よ。女史は、吏に懇願して、筆と板とを囚屋に入れ、晝は、淡水を以て墨に代へ、其の板を以て紙に用ゐ、書法と畫法を練習し、夜は窓を射る明月に對して、古人を忍び、時事に感じて、詩を詠じ、文を書き、益女子の心術を高尙になさしめたりき。亦、女史は鳩の温良なる性質いと女性に類するを愛して、幽閉中も、獄吏の許可を得て、手ら數羽を養ひ居たりしとかや。其の際、女史の作りたりし詩文少なからざるも、所謂男文字にして、玆に揭ぐるは如何と思へど、省きぬ。

或は、女史は、一生涯に、養子をなすこと六七度に及びたりしも、悉、離緣したりしを以て、其の放恣なる氣質現はれて、他人の子孫を養ふ能はざりしならん乎と疑ふものあり。されど、吾は之を

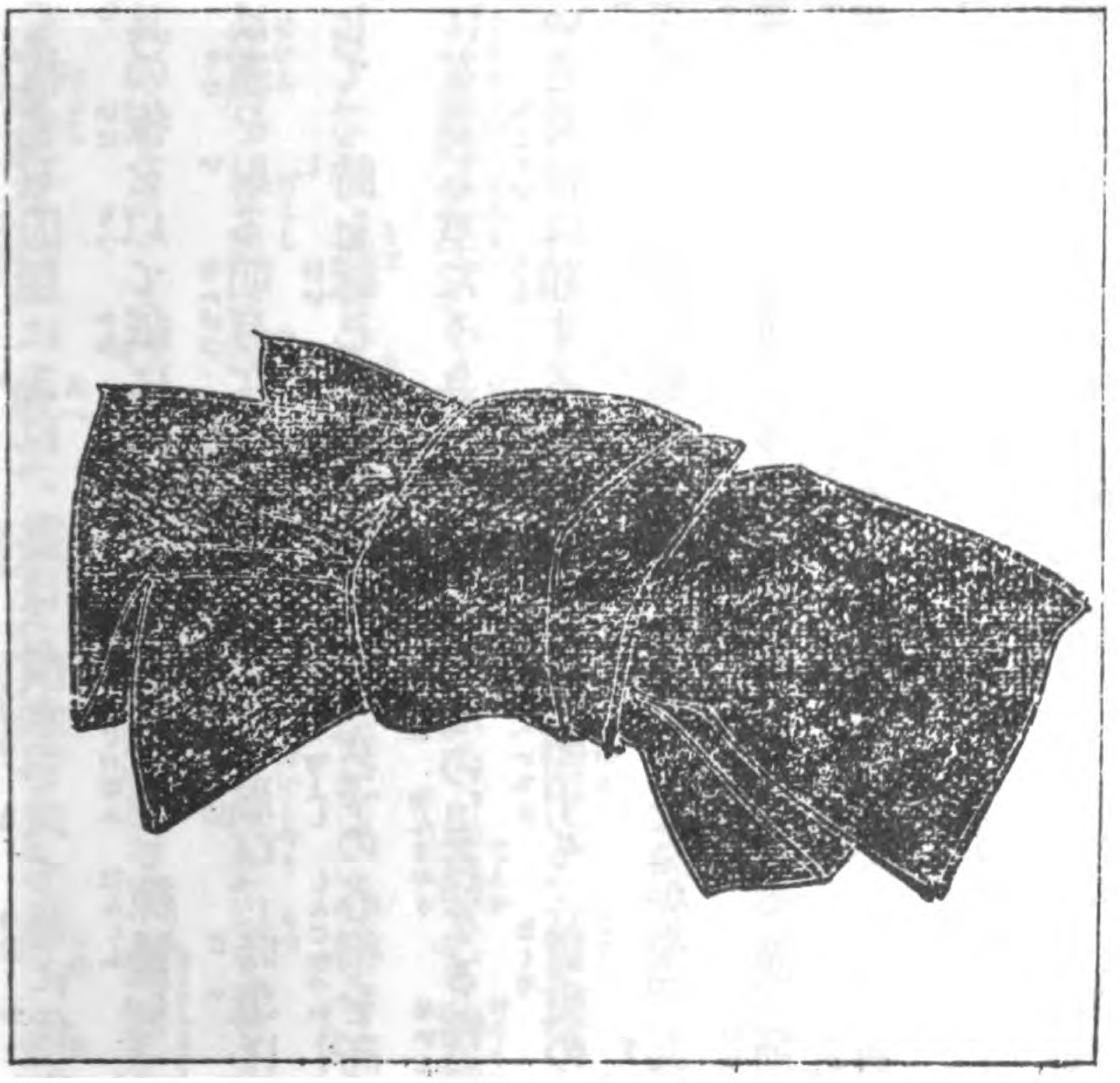
女史の放恣に歸せずして、反て、女史の秀抜なる人物の然らしめたりけんと言はんと欲す。何となれば、女史は、己れ智德兼備するを以て、恒に、人を責むるに君子を以て待したりけれど、凡兒俗女を己れの子と名づけ、生活を共にするに忍びざりたりけん。されど、人は、一般浮世の習はせを知るを尊ぶべければ、此の點は、後進のもの丶、女史に倣ふべからざる所なり。要するに、女史は德智を兼ぬる傑女なりき。好し、其の肉体は朽つるとも、其の芳名は、千歳を經るとも、滅せざるべし。誰か慕ひ且つ尊ばざらんや。

春雨のこまかにものをおもふ夜は
ふりにし人もゆめよみねつ丶

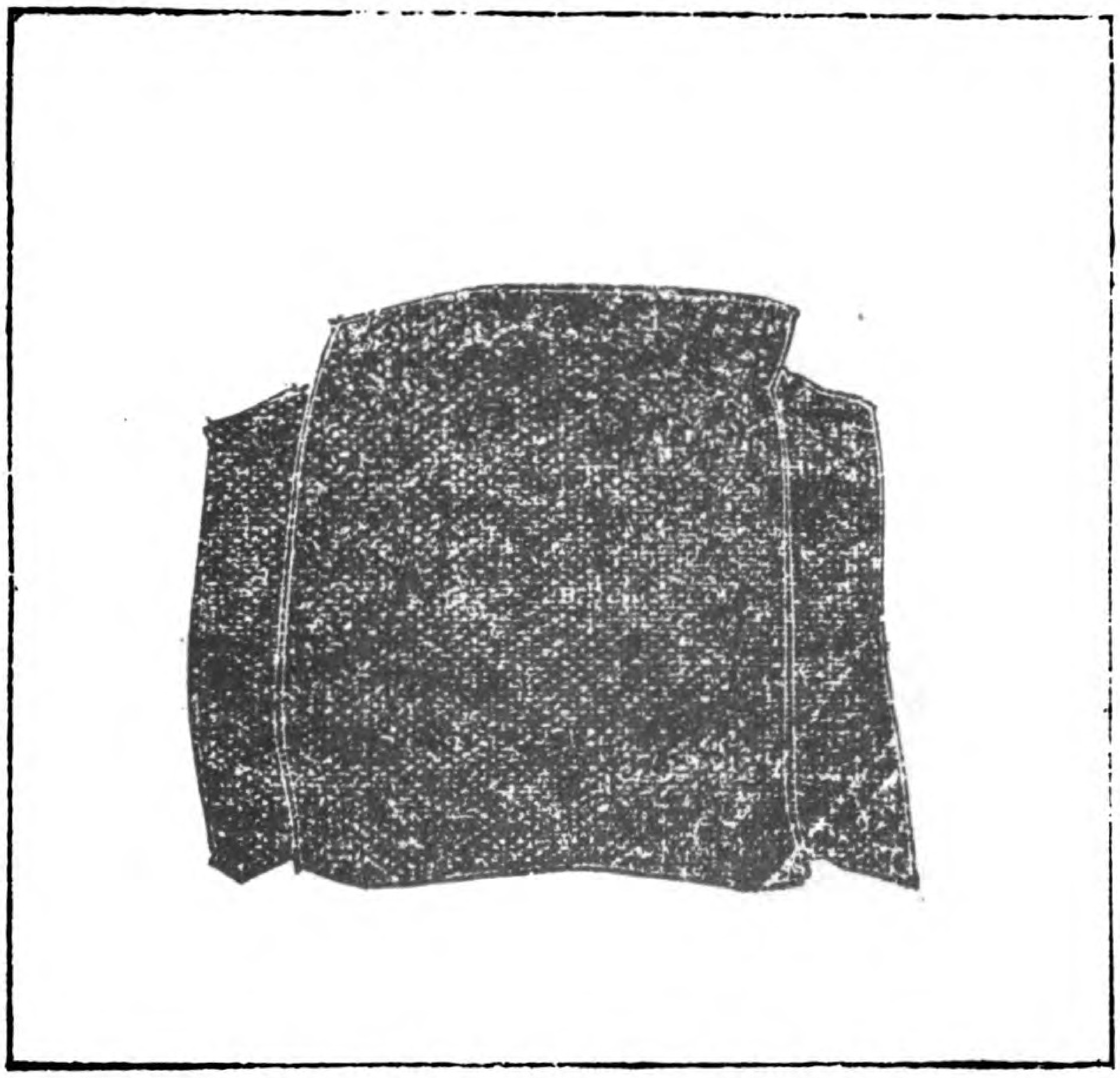
井蛙小録　井上頼文

帯のむすびかた（承前）

引ゑめ

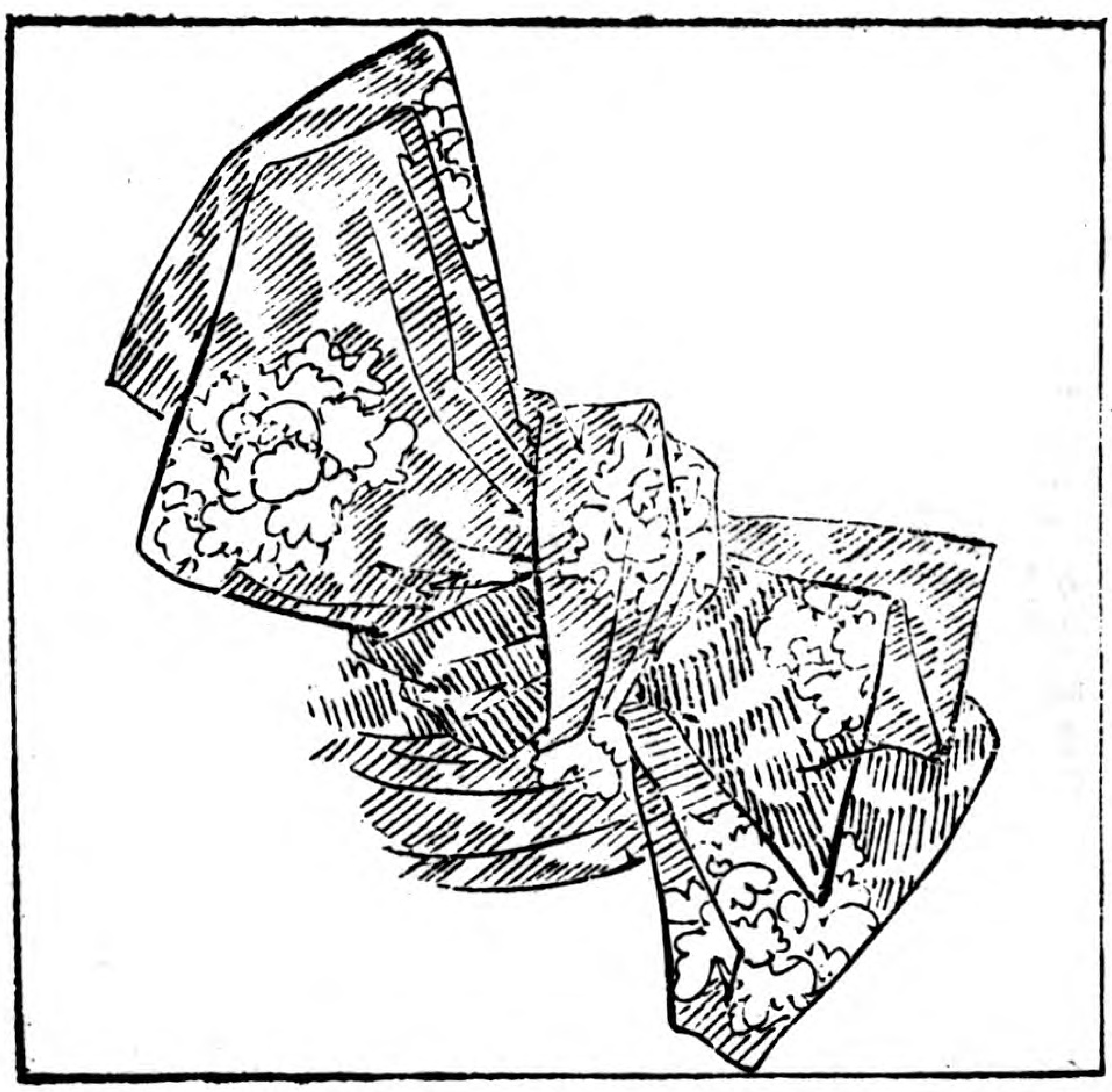


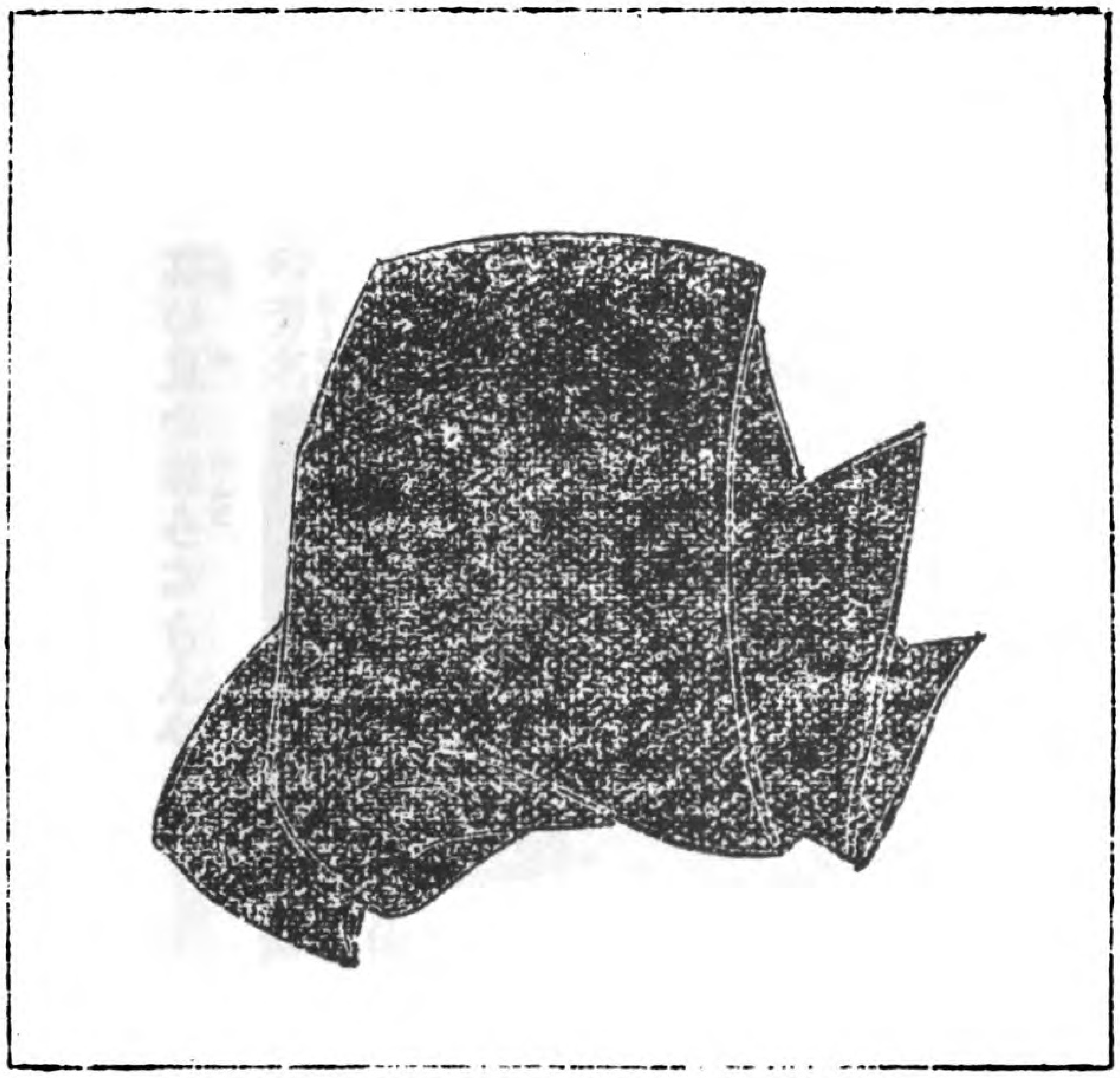
文庫結び



吉彌結び

又こしもとむすびともいふ





高雄むすび

あらずもがな（第二）

鹽井雨江

(二)人だに見れど、大なる唇を動かして、頻りに物云ひ懸くる、あらずもかななり。人よりもの云はれなど、柔しげに一言二言應答へたるが、降る雨に花の雫の、一雫二雫、散る心地してあらゆかしく思はるゝなり。人のもの云ひ誘はぬに、此方よりものいひかけたる、風のふくとしもなきに、徒らに散る花の心地して、誠に甲斐なくあらずもかななり。

そうじて言葉多きは、女子のよからぬ癖の中の、よからぬ癖になり。女子はもの數少きこそ、やさしくあはれなれ。よしや多くいひたりとも、やさしくあはれなる物語したらむには、なかな

かに多しとは思はれず。さはいへ、多き言葉には、なか／＼にやさしくあはれなるは少し。言葉といふもの、兎角に下り易く、物語りといふもの、必ず流れ易し。

おのれ此正月の事なりけり。友の家に歌留多遊びあればとて、誘はるゝまゝゆきぬ。春なれや誠に花と見るばかりの令嬢あまたおはしけり。久方の光りのどけき春の日になど歌ひて取り爭ふさまは、げに鶯の梅の木梢にうつるが如く、見ゆる姿きこゆる聲、あまりにめでたうて夢見るごとく思ひぬ。夢のごとく思ひて取り爭ふ間に、いつしか才學めきたる令嬢やありけむ、時を得顔に和歌の功能を論ひはじめたり。

和歌の功能、一度出てしと見れば、彼方の隅には、古歌の批評はじまり、此處の隅には、今様の歌詞起りぬ。和歌の聲、やゝきえゆけば、國文といふ聲いよ／＼高く、國文つくらむと思はゞまづ和歌より入れとのゝしるあれど、國文はあまりに柔しすぎて、力なきが、玉に傷なるぞと、實にあらずもかなの高言。遂には、國文の聲、漸く低く、漢文といふ聲、歐文といふ聲も打まじり、はては文章の批評となりぬ。妾は土佐日記の簡潔なるが面白しといへど、妾は源氏の優なるが、あはれなりといふあり。いな／＼妾は、清女の才筆が學ばまほしきといふあれど、軍人の令嬢ときこえたるは、妾は太平記が勢ありて好きなりと呼ぶあり。なんなんたる舌鬪は、ます／＼烈しく、唐やうの對句を用ひるは、耳障りなりといふあれば、側には、

げに〳〵古事記風の對句が面白しといふあり。妾は謡ひ、妾は淨瑠理とまで、移りゆきぬ。

淨瑠理といふ聲きこえてより、げに妾も妾も妾もと、賛成の聲は、いつしか大閤記、二十四孝、千代萩、菅原傳授、忠臣藏、朝顔日記、兜軍記などいふ響の中に埋れぬ。さては脚本の趣向の批評となり、かしこは拙し、此處はうましと、のゝしる聲わめく聲。遂にはあさましや、福助の阿古屋も眞に迫れり、秀調のお石は、實に秀れたりなど、演劇の評判となり。あなめ〳〵あらずも哉、なくも哉、阿古屋力彌はうち捨てゝ、唯福助菊の助、彼の俳優此の男など、口角沫の飛ぶばかりになりぬ。

おのれ、ものもおぼえず、あさましくなりて、花のごとく見えし姿も、腐れたる物見る心地して、胸わるくなりぬ。鶯のごとく聞えし聲も、あやしきものゝけの鳴が如く思はれ、命とらるゝ心地すれど、あらずもがなと思ひて、怫然と暇乞ひて歸りぬ。大かた言葉の多きは、かゝるものなりけり。

これ讀まむ令孃たちは、これ讀み給はゞ、必ずをかしと笑はれなむ。笑ひて、さる者捨て置きてよ。

(三)わかき女子の一人ありありきは、何處へ行くらむ、空おぼつかなき心地す。ぬば玉の闇夜になどは、ましてあやなく、物ぐらく見ゆるなり。さはいへ、若き男子と袖つらねたるは、同胞か夫かと思ひても、なほ仇なる心地す。なか〳〵に、一人りゆきたるに、増したるおぼつかなげなり。女子は、

母ならむ人と連れ立ちたらむか道ゆく袖も、正しげなり。又若き妹あるは弟など携りたるは、いかにやさしき心ならむ、いかにうつくしき心ならむ、誠にこよなくあはれなる心地す。

(四)令孃の洋服着たる、あらずもがな。如何なる運動を爲し賜はむに便りのよかれとにやあらむ。いかなる過激の業に就き賜はむゆゑの筒袖にやあらむ。敢て聽かまほしく思ふになむ。さなくとも、孝養を盡くし、節操を守り、誠に我國の令孃の道を踏まむに、かる〳〵しき洋服ならでは叶はじ。優優たる振袖にては、便り惡しゝといふ事の、いかでかあるべき。

女子といふ者は、やさしきが本性なり。やさしき心、やさしき言葉、やさしき姿ありてこそ、誠にやさしき女子なめれ。令孃が虎をうち、獅子を搦ぎ、千里を一日に走り、九丈を一飛びに踊りあがるごとき、猛き業輕る振舞は、用なき事なめり。なか〳〵に令孃にはあらずもかななり。されば誠の令孃の道を踏むに行くに、毛のあらものゝごとき姿せずともよからむ。脛もあらはに、すねもあらはなるさませずともよからむ。

なか〳〵に、袖もゆら〳〵なるわが日の本の衣は、優美なり、高尚なり、風流なり、柔和なり。優美を好び、柔和をえらび、高尚優美を慕ふ令孃の身には、につかはしきものならむ。女子のやさしき本性に適ひたる衣なめり。しかのみならず、夏は暑く、冬は寒き歐州人の拙き服裝は、人の身にはいかならむ。胸など引きしめたる形は、令孃には

害なからずやは。見にくきもの、害あるもの、優美ならざるもの、高尚ならざるもの、柔和ならざるもの、女子に何の用かあるべき。何に令嬢にゝつかはしからむ。わらずなくもがななるものなり。

（未完）

沖繩縣下旅行日記（九）

まにく〵庵主人

廿九日、昨夜は例の用意せざりしかバ、體の中いづこといはずいたく刺されて、朝とく起く。雨戸おしあけたれど、垣根のもと壺前栽やうに作りなされ、見なれぬ花ども咲き亂れたり。西の方、即ち壺前栽のこなたには、日覆のひさし廣らかにかけわたされたる、玄關の嚴めしさ、敷物の新しき、手をうてどハイと答ふる、これはいづくの番所も同じことながら、唯温泉宿などに居たらむ心地なり。今朝の料理は何ならむ、箱根の福住、大磯の招仙閣などには劣るべけれど、こゝならバ昨夜食はざりし補は、たしかに出來べしなど、そゞろに喜びて待てども來ず、煙草の火も早や白き灰がちになりぬ。兼ねてそのことをほのめかしゝに、あはれ朝食の用意は仕らず、此地には料理屋あれバ、官員衆は大方そこにゆきて認め給ふといふ。さることとか、さらば疾くにゆきてしものをと、たちいでゝ見れど、いかにもフク木とやらいふ樹の枝に水滸傳に見えたりしやうの招牌下げられたり。小川といへる家なり。こゝを食事場と定む、蚊帳のことなど種々周旋しくる。後にてよく聞け

た、このものは、その昔那覇にて何某といひて、わろく時めきし料理屋なりけりと。役所長笹田といへる人來訪直に歸られたり。この日はことなくてくらしき。夜になりて、さきの禮をかへし、かつはこなたのこと聞かむと、笹田氏を訪ふ。わが物たづねやうのいみじう拙きものから、唯然いふわけにもあらねどなどばかり聞きて歸りき。かへりしな病院出張所の藤田氏を訪ふ。初對面のあいさつすむや、否、あまりに喉乾きたれど、水をと乞ひけるに、所には珍しきラムネこの上に一杯とも乞ひかねてとゞめけり。なかく\に水ならましかど、このものおもひもなかりけむに。明日は幸に休日なり、諸共に數久田にまからむとのこと、數久田は彼の有名なる瀧が瀨の在るところなり。もとよりのぞむところなれど、喜びうべなひて、番所に歸りぬ。

三十日、曇れり。猶、昨夜の約をふみて、藤田氏がりゆく。七里ばかり奥の急病人にせかれて、早やそゝにゆき給へりと、さらばもとの一人まてと、少しゆきたりしに、雨降りだしたれど、已むことを得ずて歸る。この日東京より某博士藍の試驗のためとやらにて出張せられしとかにて、宿を東江村六十六番地にうつさる、もと料理屋何某が住まひし家なりと。坐敷もせばく、庭のさまも見苦しくて、さとも思はれず。唯、いみじうをかしき襖の松、又は、花やうのもの畫きつけられたる上に、松或は牡丹花と墨あざやかに記されたる、何ぞの人の御注意か、あまり目なれぬ、これらや

新機軸などいふべきものか。名護といふは、大方東江村と大兼久村とを合せていふなり。東江村には、名護番所國頭役所沖繩縣病院出張所あり。大兼久村は東江とは田圃一ッ隔てたる奥の方にて、そこには、名護警察署あり。又國頭地方唯一の湯風呂屋もあり。湯つぼの深きこと、水の奇麗なること、中々首里那覇のに勝れたり。この村の入口の橋わたりたるところに碑あり、見るにをかしきふしもあれど、寫しとりぬ。

三府龍脉碑記

竊惟天分星宿。地列山川。而天地相争之美。誠莫切焉。故在地爲形者。時而爲山岡壠阜。散而爲平原郊濕。皆莫非二氣之凝布矣。是以察岡壠之所來。則知平原之發跡。所謂萬山一貫是也。吾國三府四十一縣。岡壠平原。分合向背。成乎虎伏龍蟠之勢。得乎岡幹異枝之宜。而龍脉綿々。大顯天然之姿。是誠萬世洪福之國也。前古

天孫氏首出開國。始建

王城於首里府。是由神眼之所相。豈係常人之臆度。奈至後世。妄懷愚見。或有言曰。首里偪阻。不若名護平坦之爲愈。或有言曰。屋部港自西横東。古我地港。自東横西。而其間唯有一丘爲隔矣。國頭羽地及大宜味三縣。船隻遶經郡伊二島。屢爲海風所阻。何不劈開是丘。而與船隻往還之便也云爾。嗚呼。

王城及是丘。悉皆微茫龍脉之所界。豈可妄移

王城於兹方乎。豈可劈是丘而作水路乎。今歸仁本部二縣。唯賴是丘一脉而爲三府一體。三府亦賴是丘一脉。而保球陽雄勢也必矣。方今
君王。生質天縱。德學日新。思之深。慮之切。特命臣温以鐫斯文於碑石。永俾後人知龍脉之係乎邦家景運。而有萬山一貫之理矣。旹
大清乾隆十五年庚午孟夏穀旦法司正卿兼任

國師蔡温撰

これ、即ち、當縣下に於ける大政治家蔡温が遷都の議を防遏したる雄辯大作なり。又碑の裏面には、

言上

御當國諸山地理之以氣脉相考申候得者」首里程國都之地理能所者無御座候、且亦名護羽地本部今羽仁之間屋部湊古我地湊有之、兩湊之頭小嶺相隔候故。本部今羽仁迄氣脉通屬仕申候。然處跡々之唱。名護者平地。廣太之所ゟ而國都可建處與申方爲有之由。又。屋部湊古我地湊之頭有之候。小嶺切開候而。兩湊一筋相成候者。諸船之往來致安可有之與申方茂爲有之由に人々相傳申候。若右通仕候者。御當國諸山地理之氣脉相失。國土永代之御爲甚以不宜儀御坐候間。件之趣委以碑記名護に相建候樣被仰付被下度奉存候事。

以上

己巳三月廿一日

序により、碑文の撰者蔡温の傳を記さむ。

蔡温は、久米村士人にて、明の洪武年間來琉したる閩人三十六姓中の門閥、宋の蔡襄の子孫なり、豁達にして器度あり、書史に涉獵し、政事の才に富みたりけれど、享保年間即ち尚敬のころ格外拔擢三司官（久米村人は外國人種なるを以て三司官にはなさゞる國法なりき）に任せられき。その職にあるや、舊弊を洗滌し、制度を改定し、文敎を布き、農政を興す。その山林を經する、秩然序あり。これより材木用に乏しからず、川瀆を修むる井然法あり。是より水利大に起り、民その便を得たり。今に至りてその遺制に從ふ。縣人は皆道學德行には、嘗て東夷物茂卿と程朱の學を論じて、顏色なからしめたる程順則を擧げ、政事經濟にはこの蔡温を稱し、共に古今獨歩の人物として信仰す。（西村捨三氏の南島紀事外篇伊地知貞馨氏の沖繩志によれ）或人曰はく、この頃平敷屋朝敏といへる人あり。即ち、今、猶縣人に愛讀せらるゝ若草物語、苔の下、萬歳からし、貧家記、四郎樽金等の作者、又非凡の人物なりき。この人深く蔡温の後に立つを耻ぢ、亂を起し、遂に温のために殺されぬ。勝敗の跡はともあれ、この兩人は、開國以來の豪傑なりと、蔡温が物せし林政八書といへるを、先に內務省に收められしが、その道に長き人々をして賞嘆せしめたる節々多かりしといふ。

今日午後になりて、五年生橋口二年生酒井太田の三名來れり、崇元寺にてのかねごとをおぼえてか、金武のことはまてもあれいとうれし。太田が

いたく疲れ名嘉真村にて最早々々といひて、草原にたをれふしたるさま、ことなどまねびいだして、夜更くるまでどよめきわたれり。三四日は共に在らむとのことと明日よりは如何なる日記やいで來らむと心もおかるれどさすがに樂しき方も多かり。

はら帶

小山田與清

姙婦着帶の事のものに見えたるは、中右記元永二年正月五日の條に、中宮御懷妊之間、初帶令著給也、先以大進清隆、件御帶遣仁和寺寛助僧正許、令加持後、主上令結御云々、中宮御產部類記に、同委記を引たるに、令著御帶給事、及五箇月、擇吉日令著給、先例無勘文、但當日召陰陽師被問吉方吉時也、親昵人之中、撰無其憚召御帶（當日練調之長一丈六尺許）以宮司遣御衣筥、即持參本宮、經御覽之後、爲加持遣僧許、（宮司爲御使衣冠）先例不召其人、唯遣本房也、剋限持參之後、於晝御座、向吉方令著御之云々、吾妻鏡二の卷、養和二年三月九日の條に、御臺所御著帶也、千葉介常胤之妻、依殊仰、以孫小太郎胤政、爲使獻御帶、武衞令結之、丹後局候陪膳云々、園大歷貞和三年二月九日、足利直義の室著帶の條に、戌一點着帶、今月七箇月云々、鎌倉年中行事下卷に、若君姬御所様御誕生之時云々、上代は、御着帶ノ御祝ノ時ヨリ、一二ノ箱トテ御人形ヲ入タル箱ニ合アリ云々、娶入記に、くわいにんの時帶めされ候事、五月になり候時也、人によりて、七月にもめ

し候、帯の長さ、八尺一はたもり也云々、文正草紙に、九ノ月のくるしみ、十月の產のひもをとき云々、拾芥抄下の末卷諸事吉凶日部に、懐妊着帯吉日云々、呉竹集一の卷いの部に、いはた帯、纈帯と書、女のはらみてはだにする帯也、五月といふに結也、「ひとしれぬはだへにむすぶいはた帯心づくしの月をこそ待て、」帯を結びてより產月を待て心をつくす也、」あふ事はかた結びするわざもこがいはたのおびをいつかとくべき「こゝろくるしき月をこそまて」といふ句に「人しれずはだへにむすぶいはた帯、讀人不知云々、倭訓栞由の部に、ゆはたおび、いはたおびとも見ゆ、懐妊五月に帯するをいへり、齋肌の義なるべし、云々など有り。（擁書漫筆）

草根集（づゝき）

さつき

おまへなる女房、つぼねなるがもとへおくるふみ。

あやめのかをり、なつかしきこのゆふぐれの雨は、たゞならじやと、空めのみつかはれ侍りつるを、今なむ、たゞ、此お前なる橘のうれに、二聲ぞ過ぬるは、おもひしもしるく、うれしさ、たとふべくも侍らぬを、いかにとものたまはぬよ。えきゝたまはざなりけり。おそからんは、まけわざせよと、はやう、おほせごと侍りつれバ、あすのせちすぎなむ、けう有御まけわざあらむかし。「まつ、ひとのこゝろをわきて、ほとゝぎすまのふはつ

音を先もらすらむ」ふかさ、わさゝをわけけるこそ、をかしけれ。

かへし

することわりて、下に侍るほどにて、いと、あわたゞしかれど、ほそどのゝかたに、ほのかなりしを、今、まうのぼりてこそ、と、おもひたまうるあひだに、ねたうも侍るかな。まけわざは、いかでかは。うるさきさみだれ髪を、かきやり侍るに、しばし聞ゆるほどの、おそきのみなるものを、さるは、こゝろざしことなるしのび音を、さだかにとりなしたまふや、くるしからむ。

しのびねはこゝろしてなけほとゝぎすおもひくまなき人も有けり」ことつてぞや。

みな月

ことわりのあつけさをも、いかゞ。池の心ひろく、まどの竹清らに、なつによりたる御すまひは、世の外にやと、うらやみきこえ侍るになむ。さるは、あま君の御まへの御いそぎのこと、此十日餘りと侍りつれば、むげに、けふあすになりにたるを、さまざま、いとなみたまふなる事どもは、はてたまひつや。僧の法ふく、御經のかざりよりはじめて、さこそ、萬によし有御心ばへどもを、つくしたまふらめど、はかり奉るも、たふとくなむ。こゝにのたまひつけたりし花づくえの、おほひ名香のくみ、かゝるすぢのことは、ことに、たど／＼しかれど、くどくのかたなればとて、し出侍る。何ぞかりのよそひもあらず、いとあやしげなれど、さぞかり、みがきなしたまふらん玉の御かざりど

もぞ、もてやつし侍らむこそ、中々、罪えぬべく、おもうたまへ侍れ。あなかしこ。かくれのかたの御料なれかし。また、いけのはちすの、をりにあひたる御わざに、御心の花も、ひらげおはしまし、猶、かゝる御くどくによりて、かぎりなき御よはひをも、たもたせたまひぬべきことこそ、誠に、たぐひなきわざには侍るべけれ。されど、此糸に、長き契をむすび奉りて、いまより後、春秋にたねぬみのりのよすがに、かゝることだに、つかうまつらまほしう、ねがひたまひてなむ。はた、かの御料にとて、調し侍る。御ほうふく、一くだり、にはかにて、色あひなども、いかにぞや侍れど、法師ばらに賜へかしとて、たてまつるなり。御さうじみに、きこえ奉らむは、御おこなひのさまたげなるべけれど、君にのみ、まうし侍るを、これいの御こゝろには、おろかなるさまにもや、おぼしなさまし。さらぬやうよ、御あたりのどかならむほど、よくきこえつたへさせたまひてよかし。

女畫師

乙羽庵主人

其十

一枚の彩毫に森羅万象を擒にして、松島象潟の景色をも眼前に寫し出す地旭が身も、

秋の物悲しき風物に遇ふては、万感胸に聚りて、そゞろに筆の鈍るを覺えぬ。況てや旅の空の足らぬ勝なる、何彼につけて哀れ深きに、孤雁の夜半天を啼き過ぎて、片雲に隠されし眉月の前に落つるなど、いづれも丹青の材料ならぬは無けれど、みな腸を斷つの媒なり。

池旭は戰塲を出でゝ、千里の長途に上りたれど、さして行くべき方向を知らねば、氣の向く方を志し、先づ奈良京都の舊都に遊び、それより須磨明石の景にうかれて、九州に押渡り、其處此處と寫生を試み、其後南部津輕の果をも眺めて、一年會津の古城趾に來りけるは、明治初年の頃なりし。

來て見れど松は曩昔の色あれど、變り果てたるお城の跡、草蓬々と生ひ茂りて、野狐の叫ぶあり。天主櫓、大手先など、荒れたる儘に殘りあれど、今は住む人も無くなりて、石垣の上には白霜重く、瓦は雨に碎けたり。

國滅びても山河其儘に在るを喜びて、小田山に登り、天野川を見渡せば、一帶の淸流は城をめぐりて、巷の片隅を裹めり。本丸の跡を見ては、昔時を忍ぶ涙に咽び、奥殿の方を望みては、御臺所に書を敎えし事などおもひ出して、たゞ潸然とうち泣くめり。

さるにても殿様はじめ御臺様には、如何遊ばせしやら、別れて久しく御音信もいたさねば　定めし頼み甲斐無き者と思し給ひけむ、我もまた恩を仇なる仕方して、國許を遁げ出でたり。今更お詫び申せしとて、御聞入れもあるまじけれど、一目逢ふて其後の御模様を承りたしと、云ひつゝ麓を見下せば、野の末は霞につゝきて、遙にして人も見えず。

白河の關を過ぎては、苦戰に斃れし亡人の魂を弔ひ、日光湖に入りては、またも詩情を肥したり。

折しも九月末の頃とて、樹々の梢は錦繍を飾り、山嬋姸にして、大谷川の水の色白し、池旭は景の面白さに、我を忘れて進み行けば、奇岩怪石雲を磨して峙ち、奔流急湍、岸を衝いて下る。華嚴の瀧の下に立ちて、李白を擬すれども、聲は前溪に響き亘りて、麓に人の在るかを怪しむ。別けて中禪寺の湖は、波靜にして色瑠璃の如く、兩岸の山は水に影を浸して、一面の鏡中、紅葉燃えんとするの眺望。男躰山の裾には、神寂びたる社の森に包まれて、朱塗りを葉蔭に隱したり。汀の華表の彼方には、葦の葉の淸き風に吹き分けらるゝ





中程より、一羽の鳥の立つを見るのみ。

冬に近き深山の景色の、いづれを見ても物哀れなるに、池旭は湖水の岸に立ちて、鳥立つ方を眺むれば、夕陽は山の端に傾きかゝりて、峯の紅葉を照りかへし、我が身の影を黒く映して、水の面を彩りたり。

こは面白き景色やと、首さし伸して、彼方を拮と見渡せば、葦茂げる蔭に方り、枯柳の本に繋げる一艘の小舟あり。品位愛でたき紳士の、一人の小僮を従ひて、短笛を弄び居たまふなり。彼方はこゝに人あるを知らざれど、風のまく／＼に漣漪の寄するにつれて、節面白く一曲を奏で給ふ。池旭はわら神妙なる聲曲や、かの遊び事のいうに優しきことと、畫も及び難し、昔時英一蝶が淺妻舟の繪は、仇しあだ波寄せてはかへす波の、徒ならぬ態を描きたれど、これは功成りて身を退きたる陶朱公が、五湖の遊びに事寄せたるか、さりとては風流なる戯れやと、感に堪ねて茫然と見惚れしが、假に膝を打て喜びつゝ。おうこのところを寫生せむと、毫を舐りて、さらさらと書き初めぬ。

舟中の二人は思はず此方を振向きけるに、見も馴れぬ女子の、四邊の景色を寫し居

るに驚き、今まで嚠喨と吹きすさめる笛の音を止めて、舟を岸邊にさし寄せ、急ぎ陸に上り給ひて、池旭が餘念無く寫生し居る傍に來りぬ。

池旭は人の氣色に驚き、遽げに毫をとゞめて、此方をじッと眺めしが、思はず互の顔を合せて。やッ、其方は池旭ぢやないか。

峯の嵐か松風の外は、知る者無しと思ひ居し池旭を、今しもまざ／＼と呼びかけたる男の聲に。はい／＼、妾は仰せの池旭と申まする女畫師、して彼方樣はと云ひつつ、その人の半顔を眺めて、これも吃驚なしぬ。

やゝ殿樣、御前さまかと、寄らんとするを、男は手をもて制して。寄るな／＼、我は今の世の屈原、さりながら世を擧げて濁れりとは云はず、われ獨り醒めたりとも思はぬ、たゞ空しく澤畔を行吟して、老ひをこの地に養ふものなり、敵となり、味方となるも、固より別あるものにあらず、時世がさする戯事ぞ、さるを我のこゝに在るは、なほ退之が潮洲の謫居か、松平肥後とも云はれし者の、なれの果はこれぞ、此方は天爵の畫師羨ましと、涙を隱して宣ふに、池旭も貰ひ泣きして、却て大名に羨まるゝ定め無き身を恨みける。

（をはり）

花菖蒲

其五（上）

千稲子

春とはいへど、今年は春にはあらざりけり。瓊殿暗雲に埋れて、万里の長風は夜怒り、蕭條たり、寂寥たり、烟雨下界を包むで、再び碧天の清月を仰ぐこと難きぞ悲しき。「雲の上行く末遠く見し月の、光消えぬと聞くぞわびしき。」

あはれ悲しきかな。帝は現つ御神の光を収めて天の岩屋に隠れ給ひぬ。百万の國民は、父を喪ひ、母に離れたる孤子の如く、袂は涙に朽ちて、不斷の八重雲晴間なく、暫しと御袖に縋りまつるも、あはれ悲しや、東山の麓に立登る夕の烟、末は何處に宿りますか。さらぬだに心安からぬ都大路、燈火の影消えて、暗を辿る人心、之に加へて、快らぬ注進は櫛の歯の如く、聞く度に胸つぶれて、腸は切り離さるゝが如し。茲に始めて榮花の夢覺めて、水霜に片羽むしられたる蝶胡蝶。後悔五臟を突いて、思はず我慢の腰を折り、太き溜息よ消え行く兆を留めて、其身は怪しき熱病に

遮られ、無殘！玆に中柱ぽつきと折れ、今は昔日の氣力あらず、噪ぐ葦の葉に露の生命！

さりとて止む可きにあらねど、八方に追討の軍は繰り出れぬ。馬は高く嘶いて、旗は曉風に飜へり、鎧の色威、甲の金座、眩き計りに照り合ひて、流石やがて死ぬべき氣色も見えぬ秋の蟬なりけり。

剛將の下に弱卒なしといへど、怯將の下には逃足早き蚊蜻蛉兵卒の多き筈なり。ろれかわらぬか、元來怯といはんか弱といはんか、兎角口賢しき京童に、褒めていはれぬ內大臣殿。其下に使はるゝ青山親子は、主が威勢を頭に蒙りて、性來低き肩を滿々と張つて小山を造り、鼻の先に風を割つて、太刀の鞆を扇子に彈き、眼前の人々を頤の下に見おろして、フゝと冷笑ひ、其後影に唾を吐きかけらるゝを知らぬ横着者なり、折々大臣殿の軍の模樣は如何あらんとの御尋ねに、蛆虫如き源氏の奴等、飛んだとて、跳ねたとて、何を致し候はん。御心安く思召されよ、元御一族の方々は、無益らぬ事に怯ぢ給ひ、少し計りの事に轉倒して驅け廻り、蛇に見込れた蛙の如く、甚だ解し惡き御振舞に候。總じて敵に向ふ程の武將が、未だ敵の見ぬ內に、

あの御様にては、軍の手配り兵の用心より、進むで敵の虚を突き實を避け、或は正或は奇、或は陰或は陽と、我軍を手足の如く遣ふこと甚だ覺束なし。中にも新中納言殿は、表は飾り給へど實は大の御卑怯、かく申せば何となく後めたき言ひ條に候へど、甲の緒を緊る手さへ震ひ、馬に跨る足さへわなゝき給ひて、彼の向ひ遊ばし經ヶ島は甚だ氣遣はしく覺え候。之に加へて若殿知章様は、筆を取つては御達者か知らねど、采配取つて軍の御指揮は、困難しとも困難し、されば其に從ふ兵卒も、蔭にては聞くも片腹痛き雜言を吐き、其下に使はるゝを身の耻と心得候ふ如き有様、總て軍は、兵卒の心一致せざれば敵の堅を破る事難く、却て敵の勢を増す媒介となり候へば、今に軍散々に潰れて、闕下に泣言述べ給ふ折、よく〳〵御處置あらせはしと存じ候。若し御一族なりとて御假借あらねば、其他の方々も自然心許し給ふやう成り候はん。軍の事に就きて寛なるは大の禁物に候などゝ、縱横無盡に吹き出す毒蛇の息に、陰險の鋭刃をくはへて、互ひの御中を殺ぎ離さんと、眞向目掛けて斬り込む尖先は鋭し〳〵。

これは即ち追手の謀にて、搦手の方は如何といふに、知章が通ふと聞きし、嵯峨野

の奥亀山の庵を顯はせ、初め知章を無き者にせんとせしに、うま〳〵と仕損じたれど、此度は留守を狙つて、見事病みたる老母を倒せしが、其夜忽ち彼の使の二人は、森の蔭に首を掻れて手伏張り居しよ、これはと驚いたれど、何として此れで默つて居るべき、巧みの綾を益廣げて、今知章か出陣の留守な幸、彼の菖蒲をも無き者として、知章を散々に泣せんとの魂膽、さてもこまでも恐ろしや。

✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿✿

炎熱鐵も溶さん計りに、遠慮會釋も無く直照しに照せば、加茂川の流涸れてそよ風の源は茲に絶れ。人はさながら炙らるゝが如し。されど日輪西の茂葉に沈む頃は、何處よりか一陣の淸風、松の梢に琴の調べを殘して、流るゝ汗は初めてかはきぬ。平生ならこれより羽衣霓裳夕風に縫はして樂しまんを、今にも高波崩れ掛らんとする此頃、戸は日影消ゆると共に閉されて、夜は寂寞益々寂寞を極め、二更三更、万籟聲やむで艸木も共に眠れど、露のみ衣を浸して恰も秋の樣なり。かゝる時、砂に足音をそつと舐らして、六波羅の二町程西、靑山が屋敷の前を行きかふ怪しの者あり。暗を破つて白き衣の夜風にひらめく間より、雪の如き顏色微に洩れて、頻に

踵を振り返り前を隙し、人の影はあらぬかと氣遣ふ樣なり。やがて門の戸にぴつたりと身を寄せ、内の氣配を計り、暫し其處に佇みて考へしが、戻り來て裏の方へ二足三足歩まんとして俄に其足を止め、屢點頭ながら此度は心を決してか、又門に差寄り戸をほと／＼と叩く、程經てオーと欠伸交りの寢惚け聲、物に包まれた如く僅に聞ゆる内、ごと／＼と足音して何れよりといへぞ、枝に宿る鶯の玉を轉ばす優しき聲にて、御殿の奥より參り侍りし使に候、急ぎの御用ぞ開け給へやといふこの言に、身も疑も共に溶けやしけん、容易く此門は開かれたり。

文林

雨中雉　近衛　忠煕

降雨にかすむはるののこゝかして
羽ぶく音してきゞすなくなり

東久世通禧

しづがやの軒の山あしかつちりて
そほふる雨にきゞすなくなり

鍋島　直大

春雨のふる野のみちのいふまぐれ

ともよぶきじの聲ぞきこゆる

長岡　護美

打しめるとこをはなれて朝まだき
岡べのきゞすあめになくなり

宮地　厳夫

朝がすみ雨になりぬるならし野の
小松かくれにきゞすなくなり

小出　粲

春雨にぬらすもすそもさむからぬ
野路のさゝ原きゞすなくなり

坂　正臣

松間鶯

松にのみなく聲すなりうぐひすの
こゝろは花にうつらざるらん

遠藤武者袈裟の首を見る圖に

松浦　辰男

あはれあるけさの姿にものゝふの
こゝろの鬼もきえて泣くらし

藤井　行麿

春月

秋よりも月のあはれはますかゞみ
花くもりせるはるのよのそら

片岡　正占

春雨

此頃は野やまをかけてくさも木も
芽を春さめのふらぬ日ぞなき

岡部　譲

鶯花契万春

谷をいでぬうぐひすぞなき万代を
ひらくる御代の花にちぎりて

上地　信光

川霞

ちよ川のあなたに立るまつむらも

かすみにしづむ春のあけぼの

神功皇后　西川須賀雄

敷島のやまとにはあらぬから國を
言むけませり手はやめにして

野春雨　糸山貞幹

菫つむをとめがそでやゑめるらん
野邊のかすみの雨となりゆく

夜叉御前　佐々豐水

おそろしき名にはあれども床敷は
とぎしこゝろのかゞみなり鬼

河邊柳　草野隆道

夕月のかげもうつりてかつらがは
なびくやなぎのなつかしき哉

故郷春月　千日亮

忍れむむかしのかげもうつるなり
あすかの川のはるのよのつき

好文亭に梅見にまかりて　遠山操

うぐひすの鳴聲ながらうめそのゝ
さかりはゑにもうつしてし哉

弟橘比賣命　佐藤恭順

荒波のうへにちりぬもたちむなの
かくはしき名はよに流れけり

雨中雉　鍋島榮子

見渡せむ春さめかすむかたをかの
ををざゝがくれにきゞす鳴なり

松平健子

雨ふりてうめの花ちるかたをかの
かすみがくれにきゞす鳴なり

鶴　久子

狩人もあめには來じとおもふ野に
あわたゞしくも鳴きゞすかな

小督　諏訪　晴子

思ひきや嵯峨野の奥のをみなへし
露のなさけのかゝるべしとは

柳風　三輪田眞佐子

長閑なる風のすがたのうちなびく
やなぎの枝にみゆるはるかな

朝霞　安東　菊子

ましばたくあさげのけふり立添て
かすみにうづむをその里むら

山家春　小川　昌子

のがれ來しかひはあり鳬長閑にも
花見てくらすやまかげのいほは

玉　師岡須賀子

いづくにかあぎとの玉は求むべき
たつの市にもうるひとはなし

寄桃祝　片岡　光子

春ごとにさきそふもゝを三千年の
その後もまたきみはみるらん

雜詠　鹽井　長子

呉竹のすぐなるふしをかぞへては
まなびの窓にくらすわれかな

霞中鶯　河原崎楳野

春がすみたちかくしたる花そのも
それとしられてうぐひすの鳴

鶯鳴梅　河野　文子

こぞの春ねこしの梅のさきしより
　むかしわすれずき鳴うぐひす

夜梅　　大屋　丙子

大空のつきさへかすむはるの夜に
　梅が香のみはすみまさりつゝ

海邊霞　　横山壽賀子

海はたの鹽やのけぶりもろともよ
　かすみや浪のうへにたつらん

横山　柳子

見渡せる八重の潮路もひさかたの
　雲井もおなじかすみなりけり

春曙　　坂井　梅子

おちかゝる月も木ずゑに匂ひけり
　梅さくやまのはるのあけぼの

雨後春草　今様　　竹園女史

夜のまにふりし春雨に　殘れる雪はあともなし
庭の小草もきのふより　今朝は緑のいろそへぬ

女のをしへにつきて

田邊わけ子

大八しまの國うちに、昔より、女にして書よくよむあり、歌よみ文つゞり、あるは、挿花、茶の湯、管絃のみちにくはしきあり、裁縫そのほかの手業にたくみなるあれど、こを細かにいへど、書よむ人は、世の中のことにうとく、歌よみ文つゞりするは、裁縫におこたり、挿花、茶の湯に心をよすれば、家の事を忘れ、裁縫などにたくみなれど、

文字にくらきならひありて、とりぐ〳〵、得たる處、えぬところあるは、世の常なれど、今や、明治の御代となりて、こまのつめのいたりとゞまるきはみ、谷〴〵のさわたるかぎり、學校をたてさせ給ひ、汐くむあまも、山かづも、ほとにつけつゝ、物の理を辨ふべくをしへ導かせ給ふは、かの昔さまの人の如く、得たる處えぬ所もなくて、生たゝせなんの大み心ならんかし。さるをなほ近き世の女をみるに、學校にいでゝ、かづ〳〵物の理をわきまへながら、女の本分たる、裁縫をはじめ、家の事にかゝづらふ業をバ、賤しきものゝつとめと思ひたがへて、やう〳〵に、おこたりがちになり行めるは、いとも悲しきことならずや。はた、若からぬ人にも。歌をよむとて、さしもあらぬ言のはをいとほこりがにものし、ひねもすつくゑにむかひて、ものおもひ顔にくらし、あるは、挿花、茶の湯に心をよするとて、ひたぶるに、これにのみあそびてさる道知らぬ人をバとかくいひ落しめなぞする人なきにしもあらず。哀れ世のをとめたち、かけまくもかしこき大み惠にむくい奉らむの心あらば、先づ定め置かせ給ふ、學校のをしへをへたる後歌にまれ、茶にまれ　おのが好むかたに心をよせて學びつゝ、朝な夕なは二親につかへ、身を修めて、家を修むることをみなれ、母をたすけていそしみつとめ、女の手業にかくる事なく、みやび業にもたけくなりて、なたらかにもてしづめ、ゆかしき女となり給はんこそ大みこゝろにもかなふべけれ。

憐なる啞　師岡須賀子

門のあたり、子等あまた打つどひての、しる聲す。何ぞと問へど、表に人あり、小刀貸せとならん手つきして知らすれば、啞ならん、さらずは狂人なるべしなどいふ。ゆめ猥にな、かし與へそと制するほど聞ゆる鈴の音に、各教子率て教室に入りぬ。十一時ばかり授業をへて立出れば、扣所の方に、見知らぬ人居たり、見れば、先のなりけり。鉛筆もて紙に何か書くさまなり、書きては傍の教師の前に出す、教師見ては、又何かゝきて見す、見すれば又、何か書くさま心狂ひしものにもあらざるめりと近よりて見れば、まだ若き男のいたくやつれて襯衣の上に形ばかりの外套打きたるなりけり。かつ〴〵物書きては折々手もて知らするが全く啞なりけり。其を見れば岐阜縣安八郡大垣郭町百二十八番地士族西京盲啞學校生徒啞生高村何某と記す、かの一昨々年美濃の大地震にて兩親も親戚も皆死亡せて便るべきところもなし、只東京なる山崎某といふがゆかりの人なれど、萬打詫ひても昨年の末つかた、一人西京を立出でぬ。もとより足は健なり、かつは旅費といふものも多からねど、滊車にも乘らず、晝夜あゆみに歩みて、一月九日、駿州沼津につきて、とある旅宿にやどりぬ。此處まで來つれば、東京へははや三が一なり、歩みても程もあらじ、尋ぬる人にあはんこと遠からじなど、嬉しきに心ゆるみやしたりけん、其夜はいたく疲れて臥床にいりぬ。翌朝ふと目さむ

れバ、日いと高し。朝寝しつるを起出んとして、ふと見れバ傍におきし行李も衣類もなかりけり。こはいぶかし、よひには正しく此處に置つるものをとて、彼方此方さがせど影もなし。下婢を呼バんか、主人告げむかと思へど物いふ事得ぬかなしさとかきて、え堪へざりけむたゞ泣きに泣きいだしつ。とむかりわりて始末書とかきし二三枚のもの出して、これ見給ひてとかく、其盜難の始終かけるものなりけり。そを見もてゆけど主人出で來て聞くに其の行李の中なるには、金若干と旅行の證、途すがらの學校への依頼狀などありたりと、あるじ憐みて、衣類をあたへ、なほ尋ぬる人の住所知らん人は教へてよとありたり。今は宿らんにも錢なく、食はんにもすべなけれど、道すがら水を飲みては飢をしのぎ、み社の簷下み院の門前に臥し、辛くして東京につきぬ。聞き及つる芝區三田臺町をたづねて、とへども〳〵似る人もなし。警察署にゆき、區役所にゆき、調をこひしに、二十五年三月の頃までは居りぬ、其の後は知られずとて、其の書きしもの見す。日本橋區京橋區さては神田、淺草など殘るくまなく尋ぬれど、手がゝりだになしとて歎く。今はいかにせんとか思ふ。さるは何業をか學び居しと問へバ「フランネル」を織ると、象牙細工とを學びつこれこの襟卷にしたるもおのれの手業なりと知らす。さらバ東京に居りて、其の業ごともなしてはいかゞとゝへバ、あらす國の師の言もあれバとく立歸らんといふなり。そはともあれ十二時に近ければとて、晝飯與へた

るに、恭なし嬉しとかく眼より玉なす涙流るゝ、あはれとは愚なり。かくて、校長を初め人々より何かの料にとて物とらせつれば押戴きながら、御心ざしは恭けなけれど、此を受けたらんには物乞ひに似たり、國を出づる折いかに苦しむとも人に物乞はじ物乞ふなどかたく師とちかひつるが恐ろしければとて返すを強ひてとらせつ。まからんとて立出でんとすれど、今少しまちね夕飯とりにやらんにて家かり人走らせて持たせて、さらば善く心して歸れよ、つきたらんには道すがらの事委しくかきて志らせよと、かけば、必ず聞え上ぐべし。其の折は返事し給へなど答ふるほど一時になりぬ。例の授業に内に入りぬ。後にきけど、其の半ばかり、幾度か伏をがみ〳〵見返り〳〵立出づとなむ

あはれ、いと幸なき啞なるかな。常人の上だに、父母も親類もなく、はる〳〵と來て尋ぬる人は、何處とだに知られず、剰知らぬたび寢に、盜難にさへ遇ひたらんには、其のかなしさその口をしさ、いかばかりならん。されど、そのかなしさも、口をしさも、言に出でゝ、人にも知られたらんには、そのかなしさ、口をしさも、少時は忘るゝ時もあらめ。少時は思ひ和む時もあらめど。云はんとしていはれず、思へど告げんよしなき啞の心の内、いかに堪へがたかりけん。さはいへど開けゆく御代の忝なさ、學校の敎へあれどこそ、筆して物せどこそ、こをつげ、こを知り得るなれ、これのみ幸なき中の幸なりけり。あな哀なる啞なるかな。

わなおぼつかなき旅人なるかな。今は何處をか行くらんと見出せば、雨雲とはく見えて、芝浦わたりくもりはてたり。

奉賀立后二十五年式典辭

女子高等師範學校第三年生　小穴いち子

千早振る神代のいにしへより、天つ日嗣たゆることなく、正木のかつらながく傳へさせ給ひつつ、國中こと〴〵く、草の靡くがごとくなんまつろひにける。然るに、中頃よりこなた、時々に浮きたる雲の立ちさまよひて、大御光をおほへる世もありけるを、かけまくもかしこき
今上天皇陛下の天のしたしろしめしけるより、あし雲は稜威の風に打ち晴れて、五日のかぜ、十日の雨、時をたがへず、ゆたけき御代となりぬれば、古きあとをも尋ね、新しき業をも創めさせ給ひつゝ、世をまつりごたせたまふまに〳〵、しろしめす國の限りは、深き山の奥も、御惠みの露うるほはぬくまなく、遙かなる島のはても、御いつくしみの波およばぬ處なく、皇國の光の外國にさへかがやきぬるは、皆これ、
陛下の御德によるとはいへども、そも〳〵また皇后陛下の巻耳の御たすけの、古今にためしなくまします故ならじやは。されど、新しき今の皇國は、
兩陛下の生みませるところこそたゝへ奉るべけれ、なごやかなる春風はあまねき御惠によそへ奉りつべく、咲きにほふ梅は豊かなる御代のすがたと見ね、綠色こき野邊は、民草の榮ゆるさまをあらは

せる春のけふしも、其御國生みの基なる、冊立の御式を行はせ給ひけるより二十五年に滿たせ給ひぬけり。されば、岩淵にひそめる龜も出で丶、おのが齡をさゝげ奉り、松にすめる鶴も聲をきそひて、ためし少き此御典を祝ひ奉るめり。これぞ浦安の國のうらやすきしるしなるべき。あはれ、大和島根は動くことなく、妹脊の山はかけずくづれず、常磐にかきはに、萬千秋の末かけて、榮えませと、かしこみてことほぎ奉るになん。

萬代にくもることなき久かたの
つき日のみかげあふぐけふかな

奉賀立后二十五年式典辭

女子高等師範學校第三年生　西川いはを

かけまくもかしこき、我朝廷には立后の後、二十年あまり五年の春秋をむかへさせたまへるをことほがせたまひて、御祝典を行はせたまふ。草木もなびく大御代に、かく古にためしまれなる御祝典を行はせ給ふことにしあれぞ、百のつかさ人はさらにもいはず、鹽くむ海人、薪こる山がつまでもほぎたてまつりつゝ、よろこびのこゑちまたに滿ちたり。さるは、天地草木もおなし心にや、きさらぎの月もいまだすぎぬに、例よりは寒さもうすくて、いつしか春のけしきだちつゝ、國生の梅はゑみ榮え、梢にうつる鶯も、君か代の千代をなんうたひける。そもく、我邦は、神武のみかど、大和の國の畝火のかし原に都をさだめさせたまひ、基をはじめさせ給ひけるより、

呉竹のながき世をへて、いまにいたるまで、千早振神の御すぢの、いやつぎ〳〵につがせたまふこと、萬國にたぐひもあらぬ御くにぞかし。ことに、
今上陛下には、申すもかしこけれど、叡聖文武よ渡らせたまひ、大政に深く大御心をよせさを給ひて、王政復古の大業をもおこさせたまひ、明治の御代をして、我邦の黄金時代ともた丶へつべき、盛んなる域にす丶めさせたまひ、なほ、憲法の御制定國會の開設など、我邦前古にたぐひなき、御大事業をかず〳〵おこさせたまへりその御いさをは、申も中々おろかなるべし。また、
皇后宮陛下には、御かたちありさまの世にすぐれさせ給へることは、さらにも聞えさせず、古今にまれなる美徳をそなへさせ給ひ、ひとへに大政を助け奉らせ給はんとの大御心をもて、教育の道を進めさせたまひ、養蠶のわざをはげましめ給ひ、あるは病めるをたすけ、あるは貧しきをすくはせ給ひなどせさせたまへるは、古より世にすぐれたる聞えおはします、世々の
后たちの御徳を御一身にかけさせたまへりとも申べく、畏けれども、千古にたぐひまれなる御配偶と稱しまつるべし　もろこしの詩に、窈窕淑女、君子好逑、といへるも、か丶る御ためしとや申べき、冊立より廿五年の長き年月をかさねさせ給ひけるも、なほ
御二柱の陛下は、はるけき春秋み富ませたまへるを、松のみどりの色ふかくときはかきはに榮えさ

せ給はんことをなんいのり奉る。おのれかゝるわりがたき御邦の民とうまれ、たぐひまれなる御祝典にあひまゐらすることのうれしさに、いやしきことの葉をもかへりみず、をろがみてほぎ奉るになん。

雜報

●婦人慈善會の美擧　人の貧困を惻み憐むは、仁心の至にして、人の、常に心懸くべきところなれども、其の方法の善からぬは、其の益少なし。近江の婦人慈善會にては、先回の聖典御執行の折、その地の貧民、凡、千餘人に、各、白米五合ほどつゝ、袋入として、これを施與したりと云ふ。この事たる、もとより、珍かなることの極といふにはあらねど、今、世の慈善とて、色々のかはりたることをなしても、更に、その益なきに較べて、大に稱すべきことなり。

●賞むべき女生徒　鳥取縣鳥取市高等小學校女子部、第四學年の生徒兩三名、教師の許に至り、三圓余の金子をさし出だし、さていふやう、われら生徒二十余名、茲よ、幾年か、本校の教を受けしも、未、高恩の万一だに、酬ひまゐらせず、日頃、口惜しく思ひ居たりし折から、過日來、我が校は、

水災破損の修繕に、その入費もおびたゞしと聞くより、聊なりとも、日頃の志を表せんものと、われら一同申し合はせて、集めしものは、此の金子、元より九牛の一毛だに足らずとも、唯、われらが心の程を憫み、本校修繕費の中に加へ給はゞ、一同の喜、いか計りならん。年若きわれら、女の身にて、かゝる金子を持てる事、いさゝか疑はしきかどあるべけれども、こは、各自、手製の編物、或は、手工品を賣りて得たるもの、或は、身内の者より、年玉に貰ひたるものなれど、少しも、筋あしき所候はず。何とぞ、宜きに取扱ひ給へといふに、校長始め、當路の人々、皆、その志の篤きに感じ、その望に任せて、寄附せしめたりとぞ、今の世の中、皆、利益技藝にのみ、心を走らせて、德義の行爲を忽にする習なるに、能くも、其心を同じくして、此の美擧をなしゝは、誠に目出度ことにこそ。

●孝婦かつ　の賞賜金圓を受けたることは、前號に報導せしが、今、其の行實を聞くがまにまに、其の大畧を記さんに、かつは、阿波國板野郡五條村の村部孫四郎の長女にて、いと優しき生つきにて、岸田龍藏に嫁したる後は、祖母に事へ、夫にかしづき、朝夕に怠る事なし。家、固より貧しければ、龍藏は、人力車を挽き、かつは、湯屋をなせり。少しの儲にてもある時は、珍かなる食物を、祖母に薦めなどす。夜半過ぎてより、夫婦は、寢床に入らんとするに、必、祖母の安否を訪ひ、又、寢床に入りたる後、祖母が厠に行くか。

若くは、安からぬさまなどありしときは、兩人は、直に起き出で、ねもごろに慰はり慰むること常なり。かくて、昨年の四月より、祖母は、胃痛症にかゝり、起臥さへ、自由には出來かぬるより、兩人は、殊に、心を盡くして介抱せしに、そのかひもなく、同十二月、八十一にて失せぬ。兩人の悲哀みは、誠に、たとへんかたなし。かくてあるべきにもあらねば、葬事、式の如く營みし後、再、家業に勵み居るよし、上に聞こえ、二十餘年の間、一日の如く、孝養を盡くしゝ廉を以て、縣知事より、前の如く、賞賜を褒りしなりとぞ。

四月兼題

五日
- 歌……花篠
- 文……山櫻の賦

廿日
- 歌……平　政子
- 文……産衣に添へて贈る文

教の庭

三月廿日兼題　海上雲

天　府下麹町區富士見町六丁目　河原崎梅野

眉引のとほのよこやまそれならで
なみぢはるかに浮ぶくもかな

地　熊本縣菊池郡城北村　徳永萬壽子

あま小舟みなれぬ島とこぎよれば
沖にたゞよふくものひとむら

人　府下赤坂區一ツ木町　羽田三緒子

大島のけぶりはくもとたなびきて
なみしづかなる伊豆の海ばら

石井德子

白なみかあらぬか沖を見わたせば
やへの鹽路にくもかゝるなり

（天地人のほかは原稿到着順なり）

片岡光子

和田の原めもはるばると見渡せば
なみかとまがふ沖つしらくも

永井さい子

和田の原なみぢはるかに見渡せば
くもは夕日をこめにけるかな

河野文子

行く舟のほかげも見えず鳴海がた
おりゐる雲をなみにのこして

土生清子

浦邊吹く風はよわりてしまかげに
よる白波はくもにぞありける

高井米子

見渡せる沖邊はるかに打ちかすみ
たちくる浪にまがふしらくも

上野かね子

打ちわたす霞がくれのしまやまに
しろきはなみか雲かあらぬか

江馬信子

沖遠くなみたつうへにたえ間なく
たなびき渡るくものかけはし

春がすみ八重たちわたる海ばらよ
　かゝれるくもや雨となるらむ　村田きよ子

須磨の浦沖津しほかぜなぎぬれど
　そらにたなびく雲ものどけし　花山やすえ

住よしやうなぞら遠くかすめるを
　みぞまがへぬる波のうきくも　花山みさを

海の上にたゞよふをちのしら雲を
　おきつしまかと思ひけるかな　藤田　庫子

一すぢの舟路のこして和田のはら
　八十島とほくなびくうきくも　佐々有鄰子

伊勢の海しぐれやすらん雨くもの
　かゝりて島も見えわかぬなり　小橋　幹子

和田の原波路はるかにゐるくもは
　みゆきながらの島かあらぬか　小橋　幸子

和田の原立つしら浪と見えつるは
　おきの小島のくものひとむら　千々波橘子

和田のはら八十島かけて立なびく
　雲の果てしやいづこなるらん　澤田　春子

海原のなみにまがひて見ゆるなり
　しま根にかゝるくもの一むら　新沼すゑ子

舟人のうなばらとほくこぎ出ては
　そらのくものみ打ながむらむ　新沼すみ子

海はらのあまか小舟もわかぬまで
　かゝりて見ゆる沖のしらくも　内田　慶子

外國へかよふふなぢはなみのうへ
　みわたすかぎり雲とこそきけ　羽田　高子

からろおすなみまもあらき舟人か
　馴れて時しるうみのむらくも　馬島久仁子

わたつみにこぎ出し舟の見えぬ迄
　浪にまがひてかゝるしらくも　北川　貞子

明日もまた晴れわたるらん鹽竈の
　うらのうき雲あかねさしけり　大橋てい子

さしのぼる朝日の影ににほひつゝ
　海はらとほくなびくしらくも　野尻　鶴子

那古の海うみ路はるかに見渡せば
　たなびきわたる雲のむら〳〵　河岸　政子

磯近くかぢおとしげくなりぬるは
　おきべの雲やあしくなりけん　尾崎なほ子

海はらにたゝよふ雲はとほけれど　こぎ返さなんなみたゝぬ間に　羽田千世子

海そらのけしきをそふる志ら雲も　かこのこゝろは痛むらんかし　萍　賀代子

天つ日の光りきらめくうみのべに　たなひきそむるくもの一むら　板倉　達子

白雲の立ちおほひたるうみのへに　こゑはるかにも千鳥なくなり　石井　高子

船出せし人やいかにとおもひやる　こゝろにかゝる沖の志らくも　藤野たけ子

久かたのあまの志らくも海士人の　はなと見るまで沖にかゝれり　永易　幾野

和田の原靜かなる月は眞帆かけし　ふねともまがふをちの白くも　池田るい子

風あらき海そら見れどたちさわぐ　くもさへ波と見ゐまがひつゝ　橋爪　乙女

筑波ねをよそに見なして品がはの　おきにたゞよふ雲ぞゆかしき　佐藤　敬子

打ちよする波の志らべも白くもの　たちかくすなり沖の志まやま　佐藤　蝶子

風によるなみぢのすゑに棚引ける　くもはおきべの山があらぬか　青木　春子

海原のあさゐるくもにわりわけの　のこれる月もかくれぬるかな　岡　佐波子

沖のべにはるかに見えし雨ぐもは　なみにたなびき夕日かくしつ　村上　秀子

白妙のなみのゆふはな立つ見ゐて　おきにかゝれる八重の雨くも　久保田りつ子

海さちにこぎなすさひそふな人よ　あやしきくもぞ波にたゞよふ　師岡千代子

海べらに吹き送りくるけむりかと　おもへど雲のなびくなりけり　辻　やす子

心なきくもゝのどかに見ゆるかな　千尋のうみのうへにかゝれど　猪原すみ子

うな原にかゝれる雲の志づけきは　治まる御代のすがたなるらん　木原わさよ

大空にみどりにつゞくなにはゐの　おきにたゞよふ雲のひとむら　野田もと子

海原のおりゐるくものうごかぬは
　しづけき御代のすがたなりけり　野田みす子

朝ぼらけにはよき沖にこぎいでし
　ふねころ雲に見えずなりけれ　瀬戸さと子

漕ぎ出でし舟をしばしと見渡せば
　たな引く雲に見えつかくれつ　豊田政子

和田の原漕ぎ行く船も見えぬまで
　やへにかさなる沖のしらくも　黒澤安子

これやこの我日の本のはてならむ
　絲沼がおきのくものひとむら　松田靜枝

いまも尚くもは旗手となびくなり
　射るや矢島のなみぢはるかに　松田孝子

ほのぼのと夜や明ぬらし玉くしげ
　二見のうらのうへのよこぐも　橋本かす枝

今たつと見ししら雲のつかのまに
　やまとも見ゆるうみのへの空　菅谷こう子

香取海見わたすはてのうみのへに
　そら横ぎりてひらくもの見ゆ　菅谷とく子

思ひきや晴れわたりつる海の上に
　やまかとぞ見る浮くものたつ　豊田まさを

朝なぎの浪路はるかにこぐふねの
　ほのぼの見ゆる天のしらくも　國友安子

うば玉のくもる今夜はうみのくさ
　浮ぶふねさへすくなかりけり　佐々せい子

和田の原浪の上にうかぶ白くもの
　いろおもしろきながめの空　櫻田とよ子

沖に立つ雲もなみとぞ見ゆるなり
　そらと海とのはてしなければ　宮道ずゑ子

鹽風のふくにまかせてしらくもの
　うごくも浪のはなかとぞ見ゆ　宇多田揚子

朝ぼらけ大うなばらをみわたせば
　とほつ島根もくもかくれけり　水谷きを子

三月廿日兼題　春の野に遊ぶ

天　福岡縣志摩郡前原　藤野たけ子

世はのどかなる春になりぬたれこめてのみあらん
もはいなしとて程近き野邊にあくがれいでぬ麥は

たの青やかなる菜のはなのこがね色なる紫雲英の紫の雲かたどりたるげに春の錦なりけり袖ふく風も窓からでをり〳〵誘ふ匂ひえならず空高うさへづりかはす雲雀さては聲うるはしうたふ鶯さへめつらかにをかしくてつくしつはなつぼすみれなとつみすさふ中に初わらび見いでたるいとうれしく心ものびやかにて學びのいとまのをり〳〵のそゝろありきはげに春の日にしく時なきや

地　府下芝區三田四國町　師岡千代子

おもふどち遊びし去年の野べえ忘れかたう雪間の若菜つみし頃よりいつしかとしめおきつるかけさは春雨もなごりなうはれぬ今幾日あらはと野守にとはんもむつかしけれバ例の魂合へる誰かれさそひて立出つ道すがら咲匂ふ櫻花打なびく青柳枝もたわゝの山吹などをかしきに野べのけしきもいかばかりと思ひやられていそぎ行きつ思ひしもしるくいとはる〳〵と霞みわたりてのどけきにふりぬる雨のなごりの露分け行くもなか〳〵おもしろし何處も〳〵つくしわらびいと多し此處にかしこにといひつゝひとりがわれはすみれをもてつまゝし宿にうつし植ゑんにといへど雲雀やうらみん臥床のあらはにならんとてといふおのれは母子草つまん母君にさゝげんものをといふめるは歌うたひあるは物語しつゝおのがしゝ摘みはやすいと樂しさて床はなれ行く雲雀つまこふる雉子そこはかとなき鶯の聲などのめづらしくをかしきに心もるゝにわくがれ居れどやがて入相の鐘もきこえぬ日も傾きぬされど暮れぬともよし宿は雲雀にからむといはまほしくていと立ち去りがたうなむ

人　本郷區龍岡町　横山柳子

春のうらゝかなるけしきにもよほされつゝ若菜ののべをとはんとて同じ心の友かなと出たては鶯のわれらにいさるひかはにはゝと鳴くこゑもをかしう道のゆくてに咲くうめのにほひこぼれていみじきそらたきの香にも増れる心地せられてみることことのどかなるまゝにおのづからあゆみもかろくやかて心ざすのべにいたり見れは目のかぎりさながら青だゝみしきたらんやうにてすみれたんほゝ

あるは蕨土筆わすれぐさなどとり〳〵をかしう生出ぬもて來しかごよりふくしどり出でゝそこはかとなくつみめぐるはどに同じはらからにやいとらうたき少女子のみたりよたり打むれておの〳〵袂おしくつろげてたのしげにつみはやすにあふそのいひしらすをかしおのれらもいつしかかごよりこぼるゝまでつみたれバしばしいこひぬをとめらもあまたつみたるを持ちかゝへてかへり行くに日もやゝかたむきたればいさとてちり打はらひ立ちわかるに夕かすみ棚引く一しはのけしきをそへたるも又なうられしうなむ

加藤きみ子

此の比のゝどけさにつれ〳〵をなぐさむるよきよすがにもとひとり野道をたどりつるに彼方に一ときは青々ともえわたる若菜ありすみれなどのまじりたるにもおよぶまじき風情なりやう〳〵近づけば學の庭の友がきの妹にやあらん六つばかりなるをとめの袂を甲斐〳〵しく赤き絹もてあやどりてふぐしかたまなど持ちつゝ己が友なる若草をつみはやすさまのいとも愛らしく姉も妹の打興するを共によろこびいたはるさま實にゝくからぬ情合のおのづからあらはれて一しはゆかしく覺えはれば我身も妹などもちたらんにはなど思ひて諸共につみゆくにやがて袂にもみちければよきいへづとをえたるを喜びつゝよしなし事とも互に打語らひつるもまた時にとりての樂しみにこそ

藤田くら子

はる霞たな引わたる頃はよろづのどかにおもしろかれど隔てなき友と野べにあそぶばかりたのしき事はあらじとてある日つれ立ちけり人多からねば心のどかに歌などうたひてたどりつゝそこはかとなく生ひ出たるわがなつく〳〵しなどつみはやすいとたのし漸く遠近の人も出で來ればおの〳〵競ひ顔につみつゝ日のかたふくもしらでうかれしこそをかしきすさびなりけれされば折ふしのたのしきものは春のあそびにぞありける

春の野のゝどけきそらにうかれつゝ

かへるも忘らで遊びつるかな

佐々有鄰子

もののあはれは秋ぞまさるといふめれど人の心のむきむきにこそ我山かげの里は朝な夕なに音なふ友もなく囀る鳥のみなれど春としもなくいたづらにのみくらすものから心やりにひとり柴の戸おしあけてさいたづま目につくつくしつむとはなしにうかれうかれて青柳のめもはるふかき野べには成にけりこゝなん山かげはなれしひろらなるところなりける花のかげには琴ひくあり水の流には盃ながして歌よむあり雲雀の聲は琴のねにかよひ桃の花は盃にちりうかびていと興ある今日にこそあれ妾がものにうとき心もいつしか春めきぬれば歸路わすれて夕日の影の山のはに落かかるころ山ふところの伏屋にかへりて紙屋川のもくづをのみかきあつめぬ

新沼すゑ子

春もやう〳〵中ばにもなりぬれど四方のけしき何となうのどけく空うらゝに晴れわたりて種々の花とも匂ひいて今をさかりと咲き競ひ百千鳥は枝より枝へと飛びうつり聲おもしろく囀れど人のこゝろもやう〳〵うきたつ樣にもなりぬかゝるをりは家にのみ閉ち籠もり居て獨り思ひに沈まんよりは野に出でゝ日頃のうつとうしさを晴らさんも亦た體育の一つならんと心つきたれば心知れる友どち二人三人うち連れて程遠からぬ野に行きて何くれとなく遊びまはり時々唱歌などうたへば其こゑ樹の間に飛びかふ鳥のこゑに加してふしおもしろきまゝ家路をも打忘れてたはむれ居れどいつしか日も西にかたふきて漸くはださむくなりしにおどろきて皆々家路をたどりぬされどあまりおもしろかりしまゝ運はぬ筆ながらいさゝかそのよしを書きつくるになん

北川　貞子

窓戸近く鶯の初音二聲三聲さへずり出たる程に何となふ心も浮立ちたれど宿近き野邊にたどり行きてかなた此方とながむれば若草の青やかにもえ出でたるのみかいさら小川の岸べには芹のとき知り顔

なるも嬉しくて手のつめたさをもそでのぬるゝをもいとはて我おとらじと足をそらに少女子がつみはやす衣の袖の吹かせにひるがへり立渡りたる霞のやう／＼に晴れゆくなどたとふるに物なくをかし心もそらに遊居る耳もとちかく夕雲雀の妻よふ聲におどろかされてかへり見しつゝ火ともし頃やうやうわが住家にたどりつきぬ

宮地　琴與

文机に向ひてものがたりぶみなんど讀み居たれど春と言えバそゞろに心うき立て何處にか行まほしく思ふ折しも學びの友二三人柴の戸たゝきて今日はことに空はれ渡りてうらゝかなれど某所にものし給はずやと誘はれまことの嬉しきに取るものもとりあへず打ち連れ立ちて出て向ひぬ野邊にいたりてうち渡せバ薄霞棚引き渡りて山櫻も所々に咲き出でたるに野原は若草のみどりに染みて美くしきのみかは空にさへづるひばり花に戯ふるる蝴蝶なんど心も言葉も及ばぬバかりいとめでたし持ち行きたる小籠にすみれ花なんどつみつゝ友達と手を取り交し唱歌などうたひつゝ此處よ彼處よと浮れ遊びしはことよなきたのしみなりき暫しか程と思ひしに何時の間にか時うつりけん村鴉のねぐらにかへり遠山寺の鐘のひゞくに驚きふと後をかへりみれど日も早や山の端にかたぶきたるにいつもながき春の日の今日のみはなどかく短かゝるらむなど打かたらひつゝ心のみを野邊にのこしてかへり路にむかひしはいとおもしろき事になん

本多千代子

きのふまでつれなく見えし垣根の雪も名殘なう消ゑ去りて四方の山邊も打ちかすみ軒端の梅は今を盛りと咲き匂ひ谷間を出でし鶯の彼方此方に聲を弄びて春もやう／＼長閑くなりつるに何となく心も浮き立ちて文よむ事のなりがたさに學びの友一人二人伴ふて近きわたりに出で行きぬ春まだ淺きに八千草は時を得顔にもゑ出でさながらみどりの布まきたらん樣にていとおもしろし水上遠き川ぞへ柳の糸の打けぶりたるかへる雁がねのうちつゞきたる遠山の霞にこもりたるはたをかし吹く風の

かをるを見れば近き渡りに梅の林のあるなんめりとたづねしに何人のすまひならんいと荒れはてたる籬のかたはらにまた消えやらぬ雪かとぞかりうたがはるゝまで今を盛りと咲き匂へるもの二三株あり彼處此處にはあまた少女のむらがりて百草を摘みはやせるありて實に一幅の活畫の如くなり妾も携へ來し籠にくさ／＼の若菜を摘み入れて終日樂み居りしがやがて遠山寺の鐘の音におどろかされてあかぬながらも是非なく家に歸りてかくはものしぬ

永易　幾野

春の日の長閑さにそゞろ心のうきたちて野邊にあそびなんと友がきふたりばかりと共に我家を立ち出てぬ野べには草木いろ／＼の花さきまはひ百千鳥のさへずるこゑいと長閑におもしろし櫻の今を盛りとさきみだれし下よて友がきと琴など彈じ又歌を詠じてよねんなく遊び日のたくるも知らざりしに下女のむかへにをどろき西の方をながむれば日ははや山のはにかたぶきてたそかれ時となりたれは春の長き日も猶短かしとつぶやきつゝかへりぬされば春の日は野べの遊びほど樂しきことはあらじかし

岡　さは子

さいつ頃迄は枯し木草のみまていみしうすさまじかりし野邊も昨日今日はうら／＼と霞みわたり花もやう／＼咲き初めていとのどけき春のそらとぞなりぬるされば今日は年頃うちとけたる友人二人三人相連れてとある廣野にぞ出行きける見れば先つ日雪見にとて來つる野べとは打變りて一面の若草はひまなく生ひ繁りて恰も青き敷物をしきつらねたる如く處々にたてる梅の林には紅白の色を爭ひて今を盛りと咲き匂ふ様いはんかたなしまかのみならず鶯さへあちらこちらの小枝にさへづりて一しほのけしきをそへたりと見ればこゝかしこの枝に何やらんものかきたる紙切のひらめくわわれよりさきに見にこし人の結び付けたりけん短册にそありけるよみ見まほしとおもへども如何にせん春風の吹きひらめかして目とゞめもあへねば人々

只見上げてのみ居たるこそ實にをかしかりけれやがて我もとて歌讀みてたゝう紙に鉛筆もて認め結び付くるもあり若菜摘みすさむもありあるはこゝかしこありき廻るもありて永き日のかたぶくをも知らでそひくらして今はとてかへり見がちに各々家に歸りぬ

木原あさよ

或日天氣麗かにて谷間の鶯は友よびかはし花見に行かふ人のうちつゞきていと賑はしくおのづと心も浮き立ちたれど友あらど野遊せんものをと獨りごちする折しも友達二人三人誘ひ來たりければいと心うれしくて母君のゆるしを得て出で立ちぬ共共に路をたどりけるに或は胡蝶をおひ花に戯れ若菜をつみ河柳を取り物にふれ事にあたりて歌誹句などうたひさわぎぬされど古人の語に今日ありとも明日ありといふ事勿れといふ事あればいかに柳の糸の長き日とて野邊にのみあくがれず管の根のいと長き夜とて物語にのみ燈を費さず半時もあだにすぐさず一日もいたづらに暮さず能く勉め能く學ぶこそ身の本分なれとて遂に歸り路につけど日はもはや西山にかくれぬ夕食をはりて筆のすさびにかくは書きつく

豊田まさを

鶯うたひ柳もゆる好き時節になりぬれば一日のいとまを得たるまゝ二三人の友どちうち連れて野邊にうかれつゝ見るに菫菜たんぽぽうち交はりていとも心をなぐさめつゝかなたこなたを歩みて

春くれど千ぐさの花も時しりて
さきいでにけり武さしのゝ原

と歌ひつゝまた歩み行くに蕨土筆なども生出でたれどまた一しほの趣きにていとも樂しくなん日のくるゝをも忘れゐたり黄昏に至りて急ぎ家に歸りけり

春の野にともとちつれて長き日の
くるゝも知らで遊びつるなな

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

十九日、晴。夕ぐれより、小雨ふる。まろくめすに、おどろきおき、時計を見れど、四時過ぎたり。打ちなびく雲のうちに、若草山、ほのかに見え初めたる、ゐにむかへるこゝろして、物しづかなるに、みたらし川の流、庭に落ちくる音、こゝちよし。下つかさは、みな、おき出でたるべし。水くむ音、くつのおとなど聞こゆ。まだし、ためらふほどに、人々、まゐりたまへり。けふは、まづ、春日神社にまうでさせたまへり。かたへの、こぶかきもりに、うすむらさきのもの、まつはれるは、藤にかあらんといへど、愛子君、さしのぞきたまひて、かれ木のえだなるをと、わらひたまふ。藤はらのゆかりに、まがひたるこそ、よかめれなど、れいの、まけじ心にねらふ。神さびたる山のうちに、いつき奉れるみやゐのたふとさ、いふもさらなり。御手水奉りて、玉ぐしとらせたまひて、拝ませたまふ。みな、みうしろにぬかつきぬ。やをとめの舞、御覧せさす。いというなり。

やそとめがたちまふそでにいにしへの都のてぶりおもはゆるかな」。みやしろの寶物ども、御覽せさす。かくて、宮には、みこしたてまつり、人々はあゆひ。つねには、鹿の、あまたあそぶよしきゝたるに、昨日よりのにぎはひにやおぢけん、ふつに見えざりけるを、けふは、あまたみゆ。物かはんとてよぶに、なれて、よりくるさま、らうたし。みこしとゞめて、御覽せさす。

なれ〳〵てよりくるみれどかすがのゝ鹿は手がひのこゝちこそすれ」。と思ひつゞくる折、小出粲、よみて奉れり。

春ながら秋のみ山のみめぐみをうれしと鹿も鳴きぬべきかな」。北島權掌侍、

むかしよりかみにつかふる春日野の鹿は人にもなれにけるかな」。めでたくもよみたまへるかなと、後に、師の君もほめたまへり。若草山のふもとに、さうぎ奉りて、見はたし給ふ。かつらぎ、いこま山など、つねには見え侍るを、あやにくに、かすみ侍りぬなど、人々啓す。やなぎ原の權典侍、生源寺權命婦と打ちつれて、わかくさ山にのぼり給へるが、うらやましさに、なかばまで、たどりたれど、こしいたければ、ひとりとゞまりて、わらびを折る。燒きたるあとのみ、もえいでゝ、やかね

方は、にひくさに、古くさまじり生ひしげりてふみわけがたし。宮も、やがて、のぼらせたまひて、をらせ給ふ。うへに御覧せさせんとて、分けてつがねぬ。かののぼりたまひし人は、かげもみえず。いかゞし給ひけんといふうちに、かへりたまへり。すみれをつみて、柳原權典侍、

露ふかきわかくさ山のすみれくさ君にみせんとつみてけるかな」。かへりごと聞こえさせんとおもへど、とゝのはねど、やみぬ。麓にて、水のむ。あぢはひ、ことにおぼゆ。こゝに、さくら、ひともと、さかりにおほへり。桂の離宮にてみし八重櫻に、かはらざりけり。

青によしならの都をきてみればのこれる花にうぐひすのなく」。手向山の八幡宮にまゐり給ふ。楓のわかば、しげりてみつべし。それより、三月堂にいらせたまへり。

英國詩人　スコット氏著
雨江　鹽井正男先生譯

●三月廿五日出版●特別實價四十五錢●郵稅八錢
●洋裝美本
●全一冊紙數四百餘頁

今様長歌

湖上の美人

此新體長歌は歴史小説に長じ詩に秀でたる英國の大家スコット氏の作中にて殊に傑出せる湖上の美人を譯したるものなり月の如く花の如き絶世の佳人を寫し出して優美可憐讀者をして目直に之に接するの思あらしむ山間湖邊の朝暮の景色より山居の悦樂憂苦を説き來て筆々神に逼り一讀の下淸風座上に生じ烟霞机邊を纏ひ篇々精妙靈活地に擲たば金石の聲を發せんとす殊に其少女の孝情丹心より武家の狀態風俗武士の忠心節義を寫し盡して慷慨悲壯慘風悽雨神泣き鬼哭する趣ありて高尙優美慷慨悲壯なる一大長詩なれば小説として讀むも面白く長歌として謠はむも亦妙ならむ又原詩の意味は一句も落ちぬやう譯したれば原書を讀むの參考書とするも可なり近來新体長歌續々世に出づといへどもかゝる長大の詩篇は實に古來未曾有文學壇上破天荒の大作にして英詩を講ずるもの國文を味ふものは更なり苟くも明治文學の新潮流を知らんと欲するものは必ず繙かざるべからざる良書なりあはれ江湖の諸君願はくは譯者の苦心少女の苦節をあはれみて續々御購讀あらんことを乞ふ

發行所　東京神田區表神保町二番地　開新堂書店

賣捌　東京市丸善、鶴喜、目黑、東京堂、東海堂、大倉、中西屋橫濱丸善、大坂市盛文舘、梅原、三木、柳原、吉岡、熊本長崎次郎、名古屋市川瀬、三輪、其他全國各書林

女鑑第五十八號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月貳回五日廿日發行

定價壹冊金十錢
三ケ月前金五十五錢
半ケ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字詰一行金二十錢

明治廿七年三月十九日印刷
同年同月二十日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衛
同　編輯人　山根勇藏
同　發行所　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)

(明治二十四年八月八日内務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)